



リンスホーテン『東方案内記』標題紙（英語版、ロンドン、1598 年刊）

1596 年に出版されたリンスホーテン『東方案内記』のオランダ語版は、アジアへの航路情報だけでなく、アジア諸国に関する豊富な情報をもオランダ人にもたらした。同書の中で日本についても一章が設けられ、日本の国土や日本人の気質や生活、慣習、手工芸、茶道具や美術品など日本の様々な事柄について詳細に記述されている。リンスホーテンは日本までは行ったことがなかったもので、日本についての情報はインドのゴアで得たものであると推測され、長崎に滞在したことのあるポルトガル人やオランダ人が重要な情報源であったと考えられる。日文研所蔵本は、1598 年にロンドンで出版された英語版で、同書はイギリス人にとってアジア航海の貴重な指針となった。

日文研所蔵外書（解説：フレデリック・クレインス准教授）

日文研

王
海燕

在唐新羅社会の一瞥―『入唐求法巡礼行記』開成四年四月二六日条を読んで―
ガリーナ・ヴォロビヨワ 不思議に思う対照的な日本人…親切さと不親切さ

安井眞奈美 中国旅客機の模型がもたらした国際交流

稲賀繁美 ペイ・ヒョンイル 裴炯逸・배형일의追憶

―エッセイ―

共同研究 26

基礎領域研究 49

彙報 50

所員活動一覧 68

エッセイ

中国旅客機の模型がもたらした国際交流

安井 眞奈美

二〇一五年八月、私は初めて中国に降り立った。山東省済南市で開催された第二二回国際歴史科学大会 (the 22nd International Congress of Historical Sciences “<http://www.ichschina2015.org/>”)に参加するためである。ヨーロッパを中心とした社会科学系の学会が集う歴史ある総合集会で、世界中から数多くの研究者が済南市に集まった。私が発表したのは中絶と嬰兒殺しの比較研究についてのパネルである。フランス、アメリカ合衆国、アフリカ諸地域、ポーランド、ルーマニア、日本を事例に、中絶と嬰兒殺しの歴史を説明し、それらに対する人々の意識がいかに変容したかを比較するもので、たいへん刺激的なディスカッションとなった。

二〇一五年当時は、中国から日本への観光客が急増していた時期で、関西空港から山東省行の中国の航空会社による直行便は、出国ぎりぎりまで「爆買い」をし、多くの手荷物を持った中国人でほぼ占められていた。

飛行機が山東省の空港に着陸した時、まだシートベルトを外すサインが出ていないにもかかわらず、多くの乗客が立ち上り、頭上のキャビネットを開け、荷物を取り出し始めた。一人の

男性が無理やり引っ張り出した小箱が上から落ちてきて、私の顔を直撃した。激痛が走り、その後、頬がジンジンと痛み出した。

私は思わず、「あんたの荷物が顔にあたって、痛いんやけど」と関西弁で言い放った。中国語はできないし、英語でどう言えばよいかもすぐにはわからない。海外の各地を訪れる中で私が学んだ教訓は、緊急事態はとりあえず母語でよいから、直ちに周りに知らせることであった。荷物の主は何も言わず、にやにやしながら降りて行った。私は痛みが強くなってきたので、キャビンアテンダントの女性に事情を説明して氷をもらい、頬を冷やした。

ベルトコンベヤーで荷物が出てくるのを皆が待っている間、大勢でこったがえす人ごみの中、私はあの男を探した。まるで「私立探偵」の気分である。私は昔から目がよく、人を探すのは得意だ。

それらしい人物を見つけたが、さすがに一人で声をかけるのは気が引けた。そこへタイミングよく、仕事を終えたキャビンアテンダントの女性たちが機内から楽しそうに出てきたので、氷をくれた女性に話しかけた。彼女は明らかにいやそうな顔をしていたが構わず、一緒に男性のところまでついて来てもらった。それで「あなたの荷物があたって、顔が痛いです。謝ってください」と男性に英語で伝えたら、彼は日本語で「すいません」と言った。聞けば日本の企業に勤務しているという。日本語はよくわかるのだ。だったらなぜにやにや笑っていたのか。

私はかなりムツとして、「治療費は保険で請求する、しかし安全が確保されない航空会社には問題があるので、きちんと話をしたい。その際に問い合わせをするかもしれないので、名前と連絡先を教えてほしい」と言って、日本の企業名まで聞き出した。ここまで情報を得られた私は「私立探偵」としては上出来だろう。彼は「すいません」ともう一度言ってその場を去った。

キャビンアテンダントに、「安全管理について、会社のしかるべき部署に報告してほしい」と言ったら、自分でサービスマスターに連絡して、と電話番号を渡された。

学会の開催されるホテルには、二四時間勤務の中国人ドクターがいたので無料で診てもらえた。「すぐに冷やしたのはよい判断だった。もうしばらく冷やしたら治ります」と言われて、ほっとした。ホテルの従業員の女の子たちが心配して、氷を届けてくれたり、キュウリの輪切りに持ってきて中国の民間療法を教えてくれたりした。キュウリを頬に貼って、航空会社に電話した。一部始終説明すると、明日、責任者が連絡します、と電話は切れた。

翌日、責任者という中国人の男性から電話があった。少し日本語が話せるようだった。彼は英語で、「欲しいのは金か、モノか」というような意味合いのことを切り出してきた。クレマーと思われたようだった。私はさすがに怒りを伝える必要があるだろうと思い、「機内の安全が確保されないから、今後、このような事故が起きないようにと電話をしたのに、その対応は失礼ではないか。金もモノも要らない、機内の安全を確保してほしい」と言ったら、やっと真意が伝わったようで、彼は「申し訳なかった。今すぐ謝りに行きたい」と言う。断ったが取り合ってくれなかった。

四〇分後、彼はホテルにやってきた。上司の女性二人となぜかガールフレンドまで連れてきた。私は、同じような事故が起きないように対策を考えてほしい、と再度言ったが、彼らは中国人の乗客にそんなことを言ってもしかなかったが、他の飛行機でも同じようなことが起きているし、中国人はマナーを知らない、と言う。私は、他の国際線ではそんなことは起きていないし、中国人はマナーを知らないと思うなら、そのマナーをあなたの会社から作り出していけばよいではないか、と憤慨した。

彼らはようやく本気になって、どうすればよいかを教えてほしいと頼んできた。それから私たちは、ホテルの喫茶店で二時間半、機内の安全確保に向けての具体策を、ゆっくりとした英語にときおり日本語を織り交ぜて、延々と議論することになる。彼らが、途中から真剣に考え始めたことと、おそらく皆、三〇代、四〇代前半くらいの年齢で、責任者にしては若くてやる気に満ちていたことに私の心が動いたからだ。男性はその日は休日で、ガールフレンドとのデートを返上してやってきたようだ。彼女もまじめに議論に参加しているのが微笑ましかった。最後にぜひ済南市を案内したいという彼らの提案を、翌日からの学会を理由に丁重に断った。彼らは、心からのお詫びです、と今度は立派な箱詰めのお菓子とさらに大きな箱を差し出すではないか。これも断ったが、どうしても持ち帰ってほしいという。大きくて重い箱は、なんと航空会社の旅客機の大型模型であった。「社長室に飾ってあるものと同じ模型です。これだけ大きい模型は誰も持っていません。一番いいものです。どうかお持ち帰りください」と言う。私は、「帰りの飛行機でこの模型の箱が頭上のキャビネットから落ちてきて、また私の顔にあたったら洒落にならないので要らない」と断ったが、そんなことは絶対にない、と譲らない。熱意に押され、結局持ち帰ることとなった。

学会を無事に終え、同じ航空会社の飛行機で帰路についた。空港でチェックインを済ませたら、一番に案内された。タラップの階段を上って飛行機に乗り込もうとすると、なんとホテルに訪ねてきた男性が制服を着て颯爽と立っている。そしてにこやかに、「わたくしが責任をもって、関西空港まで安全にお送りいたします」と、一番よい席へ案内してくれた。そして、「この荷物はこちらでお預かりしますね」と、飛行機の模型を預かってくれた。さっそく安全を心掛けて仕事をする彼のパフォーマンスに感心した。聞けばこの飛行機に搭乗するため、シ

フトを代わってもらったのだという。

関西空港に到着し、「また機内でお会いしましょう」と彼はにこやかに挨拶した。中国の、若い力を感じた旅となった。

帰国後、巨大模型を飾ろうとしたが大きすぎて棚がない。箱に入れたまま二年ほど放置していた。

陽の目を見たのは国際日本文化研究センターに移ってからである。これまでの海外経験から国際交流について考えるイベントに、パネラーの一人として参加した。出がけに夫が、あの飛行機の模型を持って行って「国際交流」の話題をしたらと提案してくれた。あれも国際交流か……と感慨深く思い、雨の中、大きな荷物を持って会場へ向かった。イベントの最後にこのエピソードを披露して、模型を箱から取り出した。フロアから笑いが起きる中、誰かの熱い視線を感じた。高校生とおぼしき男の子がじっと私を見ている。飛行機の模型に魅了されていることは明らかだった。彼に「これ、ほしい？」とジェスチャーで伝えたら、ものすごい勢いで首を縦に振っている。イベントが終わった後、彼にプレゼントした。国際交流に興味を持ってイベントに参加していた彼は、将来パイロットになりたいという青年であった。

こうして中国の航空会社社長室にも飾られている稀有な旅客機の模型は、パイロットになる夢を持つ日本の青年のもとにめでたく届いた。

九月には国際日本文化研究センターの公務で北京に行き、日本語で講義をする。またどんな出会いが待っているのだろうか。次は、中国の新たな航空会社に挑戦することになる。

（国際日本文化研究センター教授）

（平成三〇年七月受領）

ペイ・ヒョンイル裴炯逸・배형일의追憶

稲賀 繁 美

あれは一九九七年か翌年あたりの北米アジア学会AASの席だっただろうか。日本による韓国併合下の韓半島における考古学、といったパネルがプログラムに予告されており、興味もあって行ってみた。座長を務めるペイ・ヒョンイルという名前の女性は、まだ三十代後半の元気のよい、声のよく通る女性だった。硬質の切れの良い英語で、ずばずばと言いたいことを遠慮なく発言する気風の良さが、きわめて印象的だった。日本支配下の考古学をきびしく糾弾しつつも、東アジアを見渡して、そもそも考古学という学問が朝鮮半島の歴史を塗り替えた沿革を問い直し、韓国で支配的な国粋史観を批判する姿勢も鮮明だった、と記憶する。なにより新しい留学世代が、北米で市民権を得て堂々と発言を始めた、という印象がきわめて鮮烈だった。

AASは売り手市場という雰囲気なので、パネル終了後は忙^{せわ}しないのだが、名刺を持って座長に接近すると、先方がいきなり、あなたの発表はスゴカッタなどと言ってきたので、驚いた。誤謬があったら申し訳ないが、記憶違いでなければ、ワシントンD・Cで当方が岡倉天心のインド経験を下敷きにその英文著書を読み直した発表の折だっただろうか。その場はソレデオシマイだったが、おそらくその後すぐ電子メールで遣り取りが始まった、ような気がする。まだメール以前の、ファックスの時代だったのかもしれないが。かくして筆者が一九九七年に日文研に勤務し始めて最初に招聘した客員教員（任期二〇〇〇年一月～二〇〇一年六月末）

が、ペイ・ヒョンイルとなる。

日文研に現れた彼女は、最初コモン・ルームでこそ借りてきた猫状態だったが、所員会議（まだ研究部会議という名称だったか？）で自己紹介となると、俄然、本領を発揮した。イナガ・センセイというのがAASの発表のあとで近寄ってきて、老大家の老先生だと記憶していたのに、日文研に来てみたら、こんな若い先生で、ファカルティで一番年下（これは事実誤認）だなんて知らなかった、といった調子のアツケラカンとして陰りない発言が口をついて出てくる。気分が乗ってくると声がとたんに裏返るのも彼女の特徴で、屈託のない度胸みたいなのが仄見えた。彼女を中心にして植民地期の考古学・美術史学とその周辺という主旨でミニ・シンポを開き、その成果は『日本研究』で準特集号にまとめる機会も得た。周囲の同僚の記憶では、当時彼女は博士論文を刊行する以前だったが、丁々発止たる勢いだった。

その彼女から、ロスアンジェルスのカウンティ美術館で韓国近代の美術史・考古学に関する国際学会が二〇〇一年春にあるので、来ないかと尋ねられたのが、二〇〇〇年のことではなかったか。このような企画は史上初めてだったはずで、北米合衆国西海岸での韓国コミュニティの発展もその背景にあったようだ。これも詳しい記憶は朧なのだが、いくつか強烈な印象が残る。まずなによりも、美術館講堂での彼女の発表は大変な反響呼んだ。喝采ではない、その真逆で、韓国からのデレゲイションが完全に凍り付いた。韓国では当時国是だった、古代韓国考古学が韓国の民族的自覚の古代以来連綿たる持続を証明するものである、とする前提に対して全否定に等しい発言を堂々と展開したからだ。その場での質疑応答も激烈だったが、イルバイ（彼女の自称のひとつ）が平然として受け答えして、胸を張って壇を降りる姿には、心底、舌を巻いた。なにしろ祖国から渡来した権威筋を含め、総スカンである。度胸があるの

か、それとも「我感ぜず」なのか。

いうまでもないが、韓国主流の考古学にケチをつけるとなれば、その創設者たる世代の学者の業績を否定することになる。彼らが「光復」後の韓国考古学の礎となり、会場に衆参したのはそのお嬢様方（というとな誰だか判明してしまおう）とそのお弟子筋の権威者ばかりである。儒教社会・韓国では到底許されない事態がその場に現出していた。ペイ・ヒョンイル自身は、当時北米で流行だった、民族鼓吹の国粹主義に対する批判を具現し、どうみてもイデオロギー偏向だった故国の考古学界の傾向に物申す、という姿勢だったのだろう。だが韓国勢からの非国民呼ばわりに、これはタイヘンだ、との危機感は蔽いがたい。当方も知己の、件の *founding father* のお嬢様方とお弟子筋の宴席にも呼ばれたが、あの女はなんだ、ケシカランという糾弾の席に据えられて、反論もできず、なるほどと聞き入るばかりだった。

同じ会合では、UCLA構内の美術館で夕刻からの歓迎会もあったと記憶する。これまた場所を混同しているかもしれないが、どうしたわけか美術館の出口でイルパイとオシャペリを始めた止まらなくなり、ふと気づくと周囲には誰もいない。もう送迎バスもあるまいと二人でホテルに戻ってみると、集合時間を一時間も過ぎているのに、お前たちが来ないのでバスが出せなかったと、同僚たちから非難轟轟。我々はそんなことにはまったく気づかないままだった。この時だったか、別の時だったか。どうしたわけか閑空行きの同じ飛行機に乗ることになり、例の調子でオシャペリを始めた止まらない。太平洋を越える間、機内で休みなしの放談議論が始まり、とうとう我々の左に座っていた日本人の女性から、あまりにウルサイので静かにしてください、と文句を言われて、ようやくシュンとしたことがあった。とにかく彼女と学問談義を始めると、際限がない。正直いって英語であれだけ互いに遠慮会釈なく冗談をいっ

て冷やかしたり、学問の現状に慷慨して鬱憤を晴らしたりできる相手は、ほかになかった。陰惨な不平不満も、彼女と話していると、どうしたわけか、すべてが快活な冗談の話題へと転じてしまうのである。この折は、なんと関西空港に到着してもまだ決着がつかず、空港ビルのレストランで延々とオシャベリを続けた記憶がある。意見に同意すると間髪いれず、yes, yes, yesと連呼する朗らかな声が、今も耳朶に残っている。あれは何の機会だったのだろうか。

こんな思い出を掘り出していたのでは、際限がない。ロスアンジェルズからサンタ・バーバラまでご主人アレックス・シヨゼさんの運転で送って頂いたのが、いつだったのか。このときも快晴の西海岸の高速道路を飛ばす間、やたらと学問談義で盛り上がっていた。運転のダンナ様のお父上かご親族はフィリピンで著名な作家だとのことで、彼が小説を書くために生活上の仔細な出来事をくまなく観察してノートにしている様など、それは生き生きと語ってくれた。そんな会話の最中だったのだろうか、談たまたま当方の父が末期の癌で、という話題に及ぶと、いつもの快活さは寸分も変わらぬまま、癌治療についてひどく詳しい専門的知見を彼女が披露し始めたのには驚いた。親族の事として語ったはずだが、実のところそれは、自分の体験だった。

彼女の博士論文を基礎にした *Constructing "Korean" Origins: A Critical Review of Archaeology, Historiography, and Racial Myth in Korean State-Formation Theories*, Harvard-Hallam, 2000 は北米では相当の反響を呼んだが、半島では黙殺された、という。その後彼女は、韓半島や楽浪郡の古代考古学や発掘からはやや遠のき、植民地時代の学知と観光との関係について、先駆的な業績をあげはじめた。後から考えれば、これには日文研滞在期に接した植民地資料、絵葉書などに纏わる関心が母体となったのだろう。東日本大震災直後のホノルルのAASでも久闊を叙し、その後彼女が日本に招かれる度に、何度となく東京で会い、あいかわらず切れ味鋭い発表

に喝采し、京都では家内ともども楽しい宴席を設けることもあった。発表は英語が多かったが、質疑応答となると、憶することなく日本語で対応した。自己流の無手勝流日本語だが文意は明快。公の席での発言でも遠慮など見せない度胸が爽快だった。快活で健康の見本という印象は、最期のお会いとなった昨年も、およそ変わらなかった。例によってあまりに話が弾んだせいか、それとも、当方が、身の丈にあわない副所長など拝命していて、あまりに疲弊していたためか、内容はトンと記憶にない。

二〇一八年五月下旬、同僚の山田奨治さんからメールが回送されてきた。読むと、末期の癌であと何日と生命がない、追悼記事の執筆をイナガに依頼してくれ、との携帯電話からの伝言だった。急いで返事を送って勇気づけたが、彼女がそれを読めたか否かは、ついに分からない。数日後、これもハーヴァード時代に親しい友人だった考古学者の本郷一美さんから、北米経由の計報が届いた。共通の知己でもある尹相仁には、数日前にこちらから急を知らせておいたのだが、折り返し韓国での報道や追悼記事を伝えてきた。民族主義考古学の批判者として先駆的業績を残した故人について、故国での評価は今から変貌を遂げてゆくのではあるまいか。異境の北米で地歩を築き、学生たちからの人気も博した最良の友に、惜別の讃辞を贈りたい。

サンタ・バーバラで教鞭をとっていた旧友のペイ・ヒョンイル裴炯逸・배형일이二〇一八年五月二八日に死去した。享年六十歳。以前煩った癌が再発したものの、五月までは元気に教鞭をとっていた。だがそれが急激に悪化したとのこと。あの元氣と楽天性の塊が、もうこの世には居ない。韓国でいち早く長文の追悼記事を『韓国日報』に掲載した檀国大学のシム・ジフ

ンが、敬愛する故人にこう呼びかけていた。「ヒョンイル姉さん、さようなら！」と。^{*}

^{*} 記事は尹相仁よりの提供。朴美貞さんから即刻に翻訳を頂戴した。記して謝意を表する。なお彼女の姓は韓国では少数だが、すぐそれと分かる血筋。発音は「ベ」に近いが、北米ではPaを使う、日本では「ペイ」で良いといっていたので、ここではその発音を用いる。

(国際日本文化研究センター教授)

在唐新羅人社会の一瞥

―『入唐求法巡礼行記』開成四年四月二六日条を読んで―

王 海 燕

入唐僧円仁の『入唐求法巡礼行記』（以下、『巡礼行記』と略称）は、私が最初に出会った日本人の日記であり、一九九八年四月から二〇〇四年三月にかけて、國學院大學院生の時代に指導教授の鈴木靖民先生のゼミで一貫して研究対象としていた。大学院修了後、仕事の諸事情でしばらく『巡礼行記』を離れたが、二〇〇六年から二〇一四年まで殆ど毎年末に、中国側の協力者として國學院大學研究チームとともに、『巡礼行記』に基づいて、円仁の足跡を追っており、また今年、二〇一八年五月に日文研に来てから、友人の神戸大学・古市晃先生のゼミに参加し、改めて勉強する気持ちで『巡礼行記』を読むことになった。そして、開成四年四月二六日条の記事を読んだ時に、今まであまり気に留めてこなかった「騎馬乗驢」「娘子」などの言葉に興味が湧いてきたのである。

周知のように、円仁は承和遣唐使の船に乗り、二度の失敗を経験し、ようやくにして荒波を渡って、承和五年（唐・開成三年、八三八）七月に唐土に到着した。しかし、天台山行きの許可をなかなか取れず、日本に空しく帰国することとなった開成四年（八三九）三月、円仁は求法の志を遂げるため唐に留まるという意思を固めたのである。遣唐大使藤原常嗣の承諾を得たうえで、四月五日、円仁と弟子の惟正・惟曉および水手（かこ）の丁雄満の四人は遣唐使一行

と別れ、海州東海県東海山の東辺の沿岸に上陸し、密州を経て天台山に行くことを図ったが、日本人であることを当地の人に見破られてしまう。そして、東海県の県長官さらに海州の州長官と会見した際にも自分の気持ちを伝えることは叶わず、最終的には四月一〇日、偶然にも東海県の沿岸に停泊していた帰国途中の承和遣唐使船の第二船に乗せられ、日本への帰途に着くこととなったのである。

その後、第二船の航海は最初に東海県から東を目指したが、風向によって山東半島に向かい、登州管内の海岸に漂着し、四月二六日午前に乳山西浦に停泊した。乳山は現在山東省威海市管轄下の乳山市に位置し、文字通り乳房のような形をした山であり、『巡礼行記』にも「乳山の体は峻峰、高嶺にして、頂上は鋒のごとく、山根は嶺より下って六方を指す（乳山之体、峻峰高嶺、頂上如鋒、山根自嶺下而指六方）」と語られている。^(註二) 清・李誠『萬山綱目』巻一一に乳山が「乳山口の南、海を隔てる（乳山口南、隔海）」「乳山口海中に乳山あり（乳山口海中に乳山）」とあるように、乳山の北側の乳山口と呼ばれる海湾は海水の入り込みによって山間窪地に形成された良港であり、現在、V字状の湾内の水域面積が約四六平方キロ、海湾の入口は乳山の西側に位置し、南向きで幅が約〇・七五キロとなっている。^(註三) 『巡礼行記』には、乳山西浦のほかに乳山浦・乳山泊口・乳山泊・乳山浦などの表記もあるが、すべて乳山を標示し、乳山口あたりの港や入り江を指すと思われる。

唐代において、乳山口は登州の海の玄関口の一つであり、揚州・楚州から新羅や渤海への船が頻繁に寄港して順風を待つ港であった。例えば、開成五年（八四〇）二月、新羅の清海鎮の張宝高（張保臯）^(註三)の部下である崔暈の船は揚州から出発して乳山浦に停泊し、新羅の西海岸を目指したという。また、科挙に合格して唐の官僚となった有名な新羅人の崔致遠は新羅へ帰国

するため、中和四年（八八四）一〇月に揚州から船に乗って出発したが、帰路の途中、その船も乳山に寄って順風を待っていた。^{（註四）}

『巡礼行記』開成四年四月二六日条によれば、円仁らが乳山西浦に着いたその日（四月二六日）の午後に、新羅人三〇人余りが馬あるいは驢馬に乗って円仁らのところに来て、「押衙が潮の落ちなば来たりて相看んと擬す。所以に先に来たりて候迎す（押衙潮落擬来相看、所以先来候迎）」と話しかけた。やがて、「押衙は新羅船に乗りて来たる。船を降りて岸に登るに、多く娘子あり（押衙駕新羅船来。下船登岸、多有娘子）」とある。ここに現れた押衙はその名前が明記されていないが、「新羅通事・押衙」「登州諸軍事押衙」「勾当新羅使」などの肩書を持っている新羅人の張詠であると推定されている。^{（註五）}張詠の役目は登州文登県の新羅人戸を管理することである。^{（註六）}ただし、円仁は乳山浦が登州牟平県の南界と記したことから、当時の乳山辺りは文登県に隣接しているかもしれないが、牟平県管内であった。^{（註七）}よって、乳山西浦に来た押衙は別人であった可能性がないわけではないが、もしその押衙が張詠であれば、彼は文登県のみならず、牟平県の南部沿岸の港や新羅船の監督にも携わり、そこで行政的県を超えて乳山辺りの在唐新羅人の社会とも繋がっていたことが示唆される。

ところで、押衙を迎えたシーンに登場した他の人々に目を移したい。まず、馬や驢馬に乗って来た新羅人たちを取り上げよう。

唐代においては、皇帝から庶民までの幅広い階層で馬に騎乗して出かけることが珍しくないが、乗り物が人の身分を表すものとされたため、騎馬に関する規定がしばしば出された。例えば、乾封二年（六六七）に職人・商人の乗馬を禁止、^{（註八）}貞元年間（七八五〜八〇五）に仕官でなければ大きな馬に乗ってはいけないと命じた。^{（註九）}しかし、禁令にもかかわらず、晩唐になると商

人の乗馬は盛んになった。^(註一〇)馬の飼育には金がかかるため、社会的地位の低い商人たちは騎馬行為によって富裕層に属することを誇示したのではないかと思われる。

一方で、驢馬は馬に比べるとどうであったのか。唐代の牛僧孺の『玄怪録』と李復言の『続玄怪録』の両方に収められた伝奇小説「杜子春」に、主人公の杜子春は金持ちから貧乏人へ転落していくにつれて、乗り物も貴賤の順で馬から驢馬、さらに徒歩に変わったとある。また、有名な詩人杜甫は「奉贈韋左丞丈二十二韻」の詩に「騎驢三十載、旅食京華春、朝扣富兒門、暮隨肥馬塵、殘杯與冷炙、到處潛悲辛」と書き、「馬」を富に、「驢」を貧に喩え、自分が仕官になれず、貧しい生活を送り、三〇年（一三年の説もあり）にわたって驢馬に乗っていたことを感嘆した。要するに、驢馬は馬より安い家畜で、地位の低下や経済的な貧しさを表す乗り物とされ、主に庶民に利用されていたのである。

従って、前述の新羅人三〇人余りは全員在唐新羅人であるが、乗り物からみると、異なる階層の人々によって構成されていたと推定できる。この点は、彼らの中の一人が円仁により「百姓」と記されていたことでも裏付けられる。ちなみに、その「百姓」は他の入り江で新羅船九隻からなる承和遣唐使の帰国船団を目撃したという情報を円仁らに伝えたという。そこで、彼らは交易や運搬に関係する新羅人たちと考えられる。

次に、押荷が上陸した際に、多くの「娘子」がいたことにも注目したい。この「娘子」の意味について、現在二説が併存し、一説は遊女^(註一一)、もう一説は妻または婦人の意味するとして^(註一二)いる。そもそも、中国の文献においては、「娘子」という言葉は接尾辞を有する名詞として、唐初に成立した『北齊書』祖珽伝に初見する。これは祖珽から、色事の相手の王氏未亡人（寡婦）に対しての呼称であり、美称的な表現であろう。また、楊貴妃も皇帝・玄宗の寵愛を得

て、皇后同様の礼儀や待遇を受け、宮中で「娘子」と呼ばれたとある。^(註三)楊貴妃の「娘子」は寵姫の証でありながら、皇后同然の処遇によって女主の意味も含まれるのではないか。そして、正史のみならず、唐代の文学作品においても、「娘子」の称谓がしばしばみえる。例えば、文人の著わした小説の中で教坊の宮妓の妓（伎）女も、教養を持つ遊女の仙人も「娘子」と呼ばれる^(註四)し、民間文学としての敦煌変文の中で妻も主人に「娘子」と称されている^(註五)。従って、「娘子」という用語は唐代において、民衆までの広い階層に普及し、多義的な呼び名であり、場合によって具体的な意味の異なることが分かる。

それでは、円仁の記した「娘子」たちとはいかなる意味を持っていたのであろうか。『巡礼行記』においては、女性を表現する言葉として「女弟子」「女」「女人」「女道士」「家婦」「妻」「婦人」などがあるが、「娘子」は開成四年四月二六日条のほかに例がない。すなわち、円仁は明らかに「娘子」を「妻」「婦人」と区別して日記に書き込んだのである。もちろん、単なる妻あるいは婦人の意味として「娘子」という言葉を使った可能性がないわけではないが、「娘子」たちは港で前述の新羅人たちの押衙を迎えた場面に現れたことから、押衙を歓迎するセレモニーの一環として働いていたのではなからうか。そうであれば、「娘子」たちはなぜこの場で必要とされたのであろうか。多くの先行研究は、在唐新羅人は人的ネットワークを利用して、唐の国内交易および海上交易で活躍していたと指摘している。したがって、乳山周辺に在住する在唐新羅人は、各階層の人と「娘子」を動員して押衙を迎えることで、押衙の面子を立てて満足させ、押衙との人的ネットワークを維持しようとしたと推測されるのである。そこに、「娘子」たちは場を盛り上げ、押衙を喜ばせる役割を与えられ、この意味で妓女・遊女に近い性格を持った者たちであると推想できる。

ちなみに、押衙の到着・帰宅時間について気になる点がある。『巡礼行記』によれば、この日（二六日）、押衙は未時に到着し、晩頭に帰ったという。未時は大体一三時～一五時の間であるが、晩頭は曖昧な時間である。唐代において、人々の正式な食事は毎日朝・晩の二膳しかなく、その中で晩食は大体哺時（申時、一六時）以後に行なわれる。^{（註六）}よって、もしかすると、新羅人は宴会を開いて押衙をもてなし、「娘子」たちもその宴会を盛り上げたかもしれないと想像する。

以上、『巡礼行記』開成四年四月二六日条を読んで在唐新羅人の人間関係作りの一様相を思考してみた。円仁の唐滞在と日本への帰国の過程で、在唐新羅人が果たした役割の大きさは計り知れない。それ故に『巡礼行記』の中では在唐新羅人に関する記録が多く、後世に多くの考究材料を与え、そこから在唐新羅人社会の諸相が窺われるのである。

円仁は乳山に着いた数日後、再び唐に滞留できるように動き始めた。同年（八三九）六月に、在唐新羅人の協力によって、ようやく登州赤山法花院に留まることができた。大中元年（八四七）七月二〇日に、会昌の廃仏を経験した円仁は、乳山の長淮浦に着き、日本に向かう新羅人の船に乗ることができた。その船は九月二日に登州の赤山浦から日本へ出発し、円仁の在唐九年間の旅が終わったのである。

註

- 一 『巡礼行記』開成四年四月二六日条。
- 二 山東省乳山市地方史編纂委員会編『乳山市志』第二編・自然環境・海域・海湾、齊魯書社、一九九八年。
- 三 『巡礼行記』開成五年二月一五日条。山崎雅稔「唐における新羅人居留地と交易」、『國學院大

- 學紀要』第五三卷、二〇一五年。
 - 四 崔致遠『桂苑筆耕集』卷二〇・上太尉別紙五首(四)。
 - 五 金文經「在唐新羅人社会と仏教―入唐求法巡礼行記を中心にして―」、「『アジア遊学』第二六号、二〇〇一年四月。
 - 六 『巡礼行記』会昌五年八月二七日条。
 - 七 『巡礼行記』会昌七年閏三月一〇日条。
 - 八 『唐会要』卷三一・輿服上・雜錄。
 - 九 唐・佚名『大唐傳載』。
 - 一〇 『唐会要』卷三一・輿服上・雜錄。
 - 一一 今西龍「慈覺大師入唐求法巡礼行記を読みて」(『新羅史研究』所収、国書刊行会、一九七〇年、初出一九二七年)。
 - 一二 小野勝年『入唐求法巡礼行記の研究』第二卷・開成四年四月二六日条註五、法藏館、一九八九年(復刻版)。
 - 一三 『旧唐書』楊貴妃伝。
 - 一四 崔令欽『教坊記』、張鷟『遊仙窟』など。
 - 一五 「難陀出家縁起」「舜子変」「秋胡変文」など(潘重規編『敦煌変文新書』、文津出版社、一九九四年)。
 - 一六 中村喬「早食と點心」、「立命館文学」第五六三号、二〇〇〇年二月。
- (浙江大学教授／国際日本文化研究センター外国人研究員)

不思議に思う対照的な日本人…親切さと不親切さ

ガリーナ・ヴォロビヨワ

外国の中では、私にとって日本こそが素晴らしく、住みやすい、好きな国である。その理由は、私は日本語が分かるので人々とのコミュニケーションに問題がないこと、また、尊敬に値する日本人の性質、例えば責任感、親切さ、礼儀正しさ等が挙げられる。しかし、日本文化には私が不思議に思う対照的な面もあり、ここでは日本人の親切さと不親切さについて述べたいと思う。

日本人の親切さ

日本人の知り合いはとても親切に接してくれるのでありがたく思っている。それは研究活動の支援にとどまらず、例えば日本の名所や見どころの案内など多岐にわたる、楽しい思い出となっているのだが、知り合いでもない全く見知らずの人が親切にしてくれたことが何度もあり、感動したことが度々あった。

例えば、友達と日光に行ったときのことであるが、道に迷ってしまい、通りがかった家の庭にいた日本人に事情を説明したところ、その人が自分の車を出して送ってくれたということがあった。また、空港で偶然出会った日本人のご夫婦のお宅に泊めていただいたこともある。このご夫婦は元教師で定年され、私が日本語教師だと言うと、同じ教師だということでお宅に招

待してくれただけでなく、多くの見どころまで案内してくれたのであった。それらのエピソードは一生忘れないであろう出来事となり、私は今でも感謝の気持ちでいっぱいである。

ここで、ある一日に起こった三つのエピソードを紹介したいと思う。ある日、私は新幹線に乗って東京に向かっていったのだが、窓側に座っていた女性に話しかけてみた。「この窓から富士山が見えるそうですね」。女性はあるく、「窓際の席を譲りましょうか」と言ってくれた。私は最初は断ったが、その後は感謝して席を交代してもらい、カメラを準備した。そのときちょうど通りかかった車掌に、その女性が富士山はいつ見えるのかと尋ねてくれ、車掌は時刻表を見て時間を教えてくれた。残念ながら、通過するとき富士山は雲に包まれて見えなかったのだが、おかげで私と女性はおしゃべりができた。しばらくすると、再び車掌がやって来て、曇天のせいで私達が聖なる山を見ることができなかったことを謝ったのである。彼には何の責任もない自然現象のせいだったにもかかわらず、である。実に心の温まる出来事であった。

次に起こったエピソードは、新幹線で東京駅に到着したときのことである。在来線に乗り換えるとき、私は持っていた乗車券のどれを機械に挿入するべきかを駅員に尋ね、教えられて無事に改札口を出たのだが、ちょっと歩くと誰か私を追いかけくるような足音が聞こえて声をかけられた。「お客さん、これからの行き方をご存じですか。説明しましょうか」。先ほどの駅員が、私が目的の駅までの道順が分からないのではないかと心配して追いかけてきてくれたのである。私は幸い道は分かっていたのだが、とても嬉しくなる出来事であった。

そして、その日の楽しい出来事はまだ終わっていないかった。目的の駅に到着し、パン屋さんに寄った。入り口には「今日は全品半額」と書いてあった。私はパンを選んで店員にお金を支払った。パンの値段をはっきり覚えていなかったが、半額ではなく全額払ったように感じた。

特段気にせず、私が広告の意味がはっきり分からなかったのだろうぐらいに思った。そして、領収書をもらわずにパン屋さんを出て暗い道を歩いていくと、またすぐに私を追いかけて走ってくる足音が聞こえた。振り返るとパン屋さんの店員で、私に追いつくと彼はこう言った。「お客さん、あなたは領収書を忘れました。私はその裏にスタンプを押して、あなたが支払った金額の半分を書き込みました。もし数日中にまた当店に来てくださったら、その領収書をお金の代わりに使ってパンを買うことができますよ」。

本当に幸福な日だった。私はその一日でこのような親切的な日本人に出会ったのである。一見するとそれぞれの出来事は些細なことかもしれないが、私にとっては仕事中の日本人の礼儀正しき、親切さがよく分かった出来事であり、尊敬に値する振る舞いの例であった。このような人々が日本の富と繁栄をもたらしたのだろうと考えている。

日本人の不親切さ

一方で、私は日本でなかなか理解しがたい、不思議に思う不親切な出来事にぶつかった経験もあった。日本では電車やバスで席を譲る光景があまり見られず、私は初めて日本に来たときは驚いたものである。

ある日の電車では空席がなく、私はずっと一人の男性の前に立っていたのだが、彼は足を広げて座り、隣の席にはかばんを置いて三つの席を占めていた。私は、自分の国の習慣と異なり男性が女性に席を譲らないことにも驚いた。「席を譲りなさい」と言われれば譲るのかもしれないが、自分から積極的には動かないのだなと不思議に思った。

もっと驚いたのは、電車の中で左手で赤ちゃんを抱いて右手で小さい子供の手を握って立つ

若い母親の前に、七人の若い男女が平気で座っていたことであつた。誰も彼女と子供達を気にしていなかった。私は、全世界でも文化や伝統を重んじ、親切で礼儀正しいことで名高い国であるはずの日本で、どうして電車やバスの中ではこのようにお互いが無関心でいられるのかと考へていた。知り合いの日本人に聞いたこともあるが、「以前は譲っていたが、少しずつ習慣が変わってきた」「お年寄りは弱く思われることが嫌いなようで、誰かが席を譲ろうとしても座らないことがある」という答えが返ってくるだけであつた。

私と同じ国の知人女性が日本に到着して間もない頃、電車の中でおばあさんに席を譲ろうとしたところ、おばあさんは「私はまだ立つことができます」と素っ気なく答えて断つた。知人女性はショックを受けて別の車両に逃げてしまったそうである。一方、別の日本人ではない知人女性は電車でおばあさんに席を譲ったところ、「こんなことをしてもらったことが今までなかった」ととても感謝され、リングをくれたそうである。私も日本の電車やバスで何回もお年寄りや子供連れの母親に席を譲ったが、その際、たいていの場合は最初は遠慮して断られるが、後から「本当に座ってもいいですか」と感謝して座るといふ日本人が多かつた。

ある日、私は満員電車に乗って立っていた。隣には七十代ぐらいのおばあさんが立っていた。私達の前には二人の若い女性が座っていたのだが、しばらくすると二人は同時に電車を降りていき、おばあさんと私が隣同士で座ることができた。日本人は通常、電車の中で見知らぬ人に声をかけることはないようだが、おばあさんはずっと立っていて疲れていたのが座れたことでほっとしたようで、「座れてよかった」と私に話しかけてくれた。私は若い女性達ももっと早く彼女に席を譲ればよかったのにと答えたのだが、それに対するおばあさんの答えは私を驚かせた。「私はもう仕事をしていないから役に立たないです。それに対して若い人達は仕事

をしているので疲れているだろうし休息する必要があるでしょう。もし誰か私に席を譲ってくれたらありがたいですが、譲ってくれなくても怒りません」。私は「でも彼女達にも母親がいるでしょう。もし彼女達があなたに席を譲ったら、自分達の母親にも誰かが席を譲ってくれるのだと考えて行動するべきだと思います」と言ってみたが、おばあさんは同意してくれなかった。

またある日、私は日本人の先生方と、一〇か国からなる日本語教師のグループの一員として日本の高等学校を訪問した。数人の先生は自国の民族衣装を着ていた。電車とバスを乗り継ぎ、水田の中を歩いてやっと学校に着いた。学校で私達は授業を見学し、その後、日本の武道、踊り、生け花、茶道などのレッスンも見せてもらった。それから私達は高校生に自分の国の話をして質問に答えたり、意見交換をしたりして交流を楽しんだ。訪問が終わって私達がバス停に向かうと、そこには既に先ほど交流した高校生達がいた。バスが来ると彼らは先にバスに乗って空席に座り、残りの空席に自分のかばんを置いた。私達日本語教師は立って乗るしかなかった。先ほど学校で楽しく交流したばかりなのにと、その態度に非常に驚いた。学校では茶道など、日本の伝統を教わっているのに、お年寄りや客人、先生に対する敬意や思いやりの心が育成されていないのだろうかと残念に思った。別の時には、お年寄りが座ろうとした席を、素早い子供や若者が横取りしてしまうところも何回も見た。

ある日、私を含めた女性六人で、ある研究会からの帰りに一緒に電車に乗ることがあった。私達の中には白髪の年を取った先生もいた。彼女は研究会の実行委員として一日中頑張っていたので、「疲れた、足が痛い」と言っていた。電車に乗ると一つの空席があった。私は大きい声で「先生、どうぞ座ってください」と言ったのだが、それが聞こえていたはずの若い女性が先に座ってしまい、私達六人の前で化粧直しを始めたのである。その時のなんともいえない気

持ちほうまく言葉で表現できないが、日本人の先生方が黙っていたので、私も「郷に入らば郷に従え」という諺を思い出して何も言わなかった。

私はこのような状況を改善することはそんなに困難ではないだろうと思う。子供と若者に、家庭や学校でそういった教育をすればよいのである。

私はある日本の大学で講演をして、その後、学生達と交流する機会があった。一人の学生が私に、日本にいてカルチャーショックを経験していないかと質問してきたので、「私の国では、お年寄り、身体障害者、子供連れの両親と女性に席を譲る習慣があります。そして同年代の少女にも少年が席を譲ります」と答えた。そして、「私は「姥捨て」という風習について描かれた日本の映画を思い出しました。昔々、ある日本の村では弱くなって家族に役に立たなくなった老人達を特定の山に連れて行って捨ててしまい、老人達は飢えと寒さのために死んでしまったそうです。電車やバスでのお年寄りへの無関心な態度は「姥捨て」に似ていると思います」と付け加えた。質問した学生は立ち上がり、「私はこれからお年寄りにも少女にも席を譲ります」と言ってくれた。

私は、またいつか日本に行くチャンスがあれば、お年寄りや子供連れの親、女性に席を譲る親切的な日本を見たいと思っている。

(ピシケク人文大学准教授／国際日本文化研究センター元外来研究員)

共同研究

(二〇一七年四月一日～二〇一八年三月三十一日)

〈重点共同研究〉

投企する古典性―視覚／大衆／現代

(研究代表者 荒木 浩)

(共同研究者名)

稲賀 繁美、石上 阿希、呉座 勇一、伊藤 慎吾、金
容儀、漆崎 まり、今井 秀和、ガリア・トドロヴァ・ペ
トコヴァ・ガブロフスカ、チャン・ティ・チュン・トアン、
ゴウランガ・チャラン・プラダーン、前川 志織、ローレ
ンス・マルソー、飯倉 洋一、上野 友愛、岡田 圭介、
河東 仁、恋田 知子、河野 貴美子、河野 至恩、合
山 林太郎、齋藤 真麻理、竹村 信治、中野 貴文、中
前 正志、野網 摩利子、三戸 信恵、箕浦 尚美、山本
陽子、渡部 泰明、渡辺 麻里子、深谷 大、屋良 健一

郎、平野 多恵、マラル・アンダソヴァ、徳永 誓子、土

田 耕督

(海外共同研究員名)

楊 曉捷、山藤 夏郎、李 愛淑

(研究発表)

〈第五回研究会〉

二〇一七年六月三日

ナタリー・フィリップス「The epistemological significance
of meta-physical beliefs within the socio-political context
of Heian Japan (平安時代の社会・政治的な背景から
見た超(越) 自然的な信仰の認識論的な役割)」
荒木 浩「身を投げる／子を投げる―仏伝の変容と古典の
投企性をめぐって」

二〇一七年六月四日

中前 正志「古典籍展示実践報告―仮構会話体解説文の試みなど―」

〈第六回研究会〉

二〇一七年八月一日

合山 林太郎「様々な〈和漢〉…日本漢文学プロジェクトの成果と展望」

劉 雨珍「筆談で見る明治前期の中日文学交流」

二〇一七年八月二日

エドアルド・ジュルリーニ「文学は無用か「不朽の盛事」か―平安朝前期に見る「文」の社会的役割とその世界文学における位相」

葛 継勇「『東国至人』から「郷賊」へ、「還俗僧」から「取経者」へ―留学僧円載の人間像と唐人送別詩」

デイスカッサント・滝川 幸司

〈第七回研究会〉

二〇一七年九月二三日

ダニエル・シュライ（ゲストスピーカー）「日本初期中世の歴史意識と王権―将門記から神皇正統記まで」

デイスカッサント・呉座 勇一、テーブルトーク・ダニエ

ル・シュライ「ドイツの日本研究」

二〇一七年九月二四日

金 容儀「柳田國男『遠野物語』の文化コンテンツとしての拡散と受容」

徳永 誓子「五来重の修験道研究」

〈第八回研究会〉

二〇一七年十一月一八日

伊藤 慎吾「導入…全体の概要、学問対象としてのお伽草子の受容史」

上野 友愛「お伽草子絵巻と絵師」

恋田 知子「〈奈良絵本〉の定着と近代文化」

宮腰 直人（ゲストスピーカー）「丹緑本の「発見」と「再創造」」

徳田 和夫（ゲストスピーカー）「海外需要」

二〇一七年十一月一九日

伊藤 慎吾「導入…メディアの中のお伽草子」

久保 華誉（ゲストスピーカー）「お伽草子と子どもの文化」
山本 淳（ゲストスピーカー）「近代文学とお伽草子」

内逍遙『鉢かつぎ姫』を例に」

近藤 ようこ（ゲストスピーカー）「中世を描くには」

〈第九回研究会〉

二〇一八年一月二〇日

平野 多恵「おみくじから歌占、託宣歌へ―研究・教育・

大衆化の連環―」

河野 至恩「20世紀前半の欧米語圏における「日本文学」

認識をめぐる試論」

二〇一八年一月二一日

片岡 真伊「表紙カヴァーにみる日本近代文学の英訳出版

現場／クノップ社における表紙図版選択と宣伝手法
を中心に」

前島 志保（ゲストスピーカー）「拡大される俳句の詩的

可能性——世紀転換期日本と西洋における俳句、出

版、翻訳」

運動としての大衆文化

（研究代表者 大塚 英志）

〔共同研究者名〕

北浦 寛之、エルナンデス・エルナンデス・アルバロ・ダ

ビド、吉村 和真、山本 忠宏、前川 志織、板倉 史

明、内田 力、菊地 暁、北田 暁大、近藤 和都、嵯

峨 景子、佐野 明子、杉本 仁、鈴木 麻記、鈴木 洋

仁、團 康晃、鶴見 太郎、石田 美紀、萩原 由加里、

ビョーンリオーレ・カム、藤岡 洋、牧野 守、松井 広

志、室井 康成、雑賀 忠宏、ロナルド・ジェフリー・ス

チュワート、川松 あかり、藤嶋 陽子、執行 治平、花

田 史彦、香川 雅信、上原 功一、谷島 貫太、滝浪

佑紀、櫻木 千恵

〔海外共同研究員名〕

浅野 龍哉、蔡 錦佳、齊 夢菲、秦 剛、マーク・スタ

インバーグ

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一七年七月八日

室井 康成「大衆運動としての柳田民俗学」

コメント…杉本 仁

川口 創（ゲストスピーカー）「運動は可能なのかく実践

と検証」

大塚 英志「私たちが書く憲法前文 公民の民俗学の実践

として」

〈第二回研究会〉

二〇一七年一月四日

マーク・スタインバーグ「Media Theory in Japan—60年代におけるマクルーハン理論の受容をめぐる」

秦 剛「魯迅と板垣鷹穂・柳瀬正夢」

大塚 英志「牧野守による戦前映画批評家インタビューについて（資料紹介）」

〈第三回研究会〉

二〇一八年二月一七日

竹村 民郎（ゲストスピーカー）「労働者の現場から社会を文字に起こす運動は「公民の民俗学」の戦後に於ける実践ととらえられるのか」

アロン・ジェロー（ゲストスピーカー）「映画理論と運動が緊密な関係にあった戦前の映画界をめぐる報告」

石本 悠馬（ゲストスピーカー）「メキシコワークション

プ「日本のまんが家と地震の日のことを絵巻アニメにしよう」

二〇一八年二月一八日

川松 あかり「民俗学は運動たり得るのか」

鈴木 洋仁「民俗学は運動たり得るのか」

エルナンデス・エルナンデス・アルバロ・ダビド「調査報告

「身体物語——メキシコプロレス「ルチャリブレ」レスラーヒアリング」

音と聴覚の文化史

（研究代表者 細川 周平）

〔共同研究者名〕

光平 有希、中原 ゆかり、青嶋 絢、秋吉 康晴、宇都宮 聖子、岡崎 峻、奥中 康人、柿沼 敏江、葛西 周、春日 聡、金子 智太郎、久保田 晃弘、齋藤 桂、城 一裕、谷口 文和、土田 牧子、辻本 香子、中川 克志、長崎 励朗、昼間 賢、福田 裕大、福田 貴成、細馬 宏通、横井 一江、吉田 寛、輪島 裕介、渡辺 裕、長門 洋平、越智 朝芳

〔海外共同研究員名〕

キャロリン・ステイブンス、山内 文登

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一七年五月二〇日

細川 周平「都市騒音の新奇性——関東大震災後のサウンド

スケープと音量知覚の変容」

光平 有希「近代日本における西洋音楽療法受容の勃興と展開——松沢（前・巢鴨）病院での音楽療法定論と実践を中心に——」

金子 智太郎「ドキュメンタリー・レコード」

二〇一七年五月二一日

秋吉 康晴「レコードの考古学——「音を書く」機械の由来をめぐる」

〈第二回研究会〉

二〇一七年七月二二日

福田 裕大「フランス、黎明期の録音技術・レオン・スコット・ド・マルタンヴィルの業績を再検討する」

城 一裕「ポストデジタル以降の音を生み出す構造の構築」

柿沼 敏江「オノ・ヨーコと音」

二〇一七年七月二三日

全体討論

〈第三回研究会〉

二〇一七年一〇月一四日

久保田 晃弘「遙かなる他者のための芸術 (Art for Other-

ness)」

ポール・デマニリス (ゲストスピーカー)「Snap, Crackle, Pop: The Sounds of Loose Connections」

二〇一七年一〇月一五日

渡辺 裕『感性文化論』（春秋社、二〇一七）をめぐる討論会

コメント：長門 洋平、長崎 励朗

〈第四回研究会〉

（所外開催 芦屋市立美術館）

「小杉武久 音楽のピクニック」展の展示と上映映画会の

見学

二〇一八年二月一〇日

「PR映画・記録映画・科学映画」上映会
展示見学

二〇一八年二月一一日

「マース・カニングハム舞踊団」上映会

〈第五回研究会〉

二〇一八年二月二四日

葛西 周「音楽実践の場としての温泉」

細馬 宏通「動作の手がかりとしての歌と掛け声：野沢温

泉道祖神祭りの共同作業

キャロリン・ステイブンス「Beates in Japan (Routledge, forthcoming) の予告編」

二〇一八年二月二五日

細川 周平「東アジアのレコード産業」研究会の報告

(二〇一七年一月二七―二八日、台湾開催)

山内 文登「東アジアのレコード産業」研究会の報告

(二〇一七年一月二七―二八日、台湾開催)

山内 文登「方法としての音」

〈国際共同研究〉

説話文学と歴史史料の間に

(研究代表者 倉本 一宏)

〔共同研究者名〕

榎本 渉、荒木 浩、井上 章一、呉座 勇一、ゴ・フ
ン・ラン、龔 婷、谷口 雄太、堀井 佳代子、東 真
江、石川 久美子、上野 勝之、内田 滢子、大橋 直
義、尾崎 勇、追塩 千尋、加藤 友康、川上 知里、木
下 華子、小峯 和明、佐藤 信、佐野 愛子、関 幸
彦、五月女 肇志、曾根 正人、多田 伊織、蔦尾 和

宏、中町 美香子、中村 康夫、野上 潤一、野本 東
生、白 雲飛、樋口 大祐、藤本 孝一、古橋 信孝、
保立 道久、前田 雅之、松園 斉、三舟 隆之、山下
克明、鈴木 貞美

〔海外共同研究員名〕

グエン・ティ・オワイン、宋 浣範、グエン・ヴァー・クイ
ン・ニユー、劉 曉峰、魯 成煥

〔研究発表〕

〈第五回研究会〉

二〇一七年七月八日

鈴木 貞美「『説話』の多義性―文学／歴史／文化史のな
かで」

松園 斉「中世説話集作者の歴史意識について」

内田 滢子「『仮名貞観政要』周辺」

関 幸彦「武威の来歴―保暦間記を考える」

曾根 正人「アジア仏教における因果応報教説と説話―因
果応報教説の占める教義的位置と教義テキストとして
の説話の意義」

〈第六回研究会〉

二〇一七年九月九日

上野 勝之「靈驗的事実体験の記録とその伝承」

佐野 愛子「占城王妃祭祀考」

池上 洵一（ゲストスピーカーカー）「文学の側から読んだ公

家日記」

野上 潤一「林羅山『本朝神社考』による説話の資料化と

その享受について―羅山の学問と近世前期学問史にお

ける一展開をめぐる―」

藤本 孝一「紅梅殿の壺と編纂―説話集を中心として―」

〈第七回研究会〉

（所外開催）国立公文書館・明治大学）

二〇一七年二月九日

国立公文書館にて古記録・説話の閲覧・撮影

明治大学へ移動

樋口 大祐「転生する『太平記』」

保立 道久「早良親王と還俗」

前田 雅之「古典的公共圏の成立期としての後嵯峨院時代

の役割と意味」

山下 克明「平安後期の宿曜道と属星秘法伝承」

川上 知里「『拾遺往生伝』の史実性と文学性」

〈第八回研究会〉

二〇一八年二月一〇日

木下 華子「西行物語の時間について」

五月女 肇志「『百人一首』と和歌説話」

大橋 直義「巡礼・参詣の「記」と説話」

ゴ・フォン・ラン「丁部領王の説話とホアールー祭」

3・11以後のディスクリール／『日本文化』

（研究代表者 ワダニマルシアノ ミツヨ）

〔共同研究者名〕

坪井 秀人、北浦 寛之、増田 斎、石田 美紀、久保

豊、谷川 建司、木村 朗子、川口 隆行、クリスティ

ナ・岩田・ワイケナント、清水 晶子、高橋 準、菅野

優香、出口 康夫、一ノ瀬 正樹、西村 大志、松浦 雄

介、須藤 遙子、馬 然、木下 千花、長門 洋平

〔海外共同研究員名〕

王 向華

〔研究発表〕

〈第五回研究会〉

二〇一七年五月二七日

ルース・オゼキ（ゲストスピーカーカー）「『あるときの物語』

3・11以後の日本文化を外側から見ると…」

コメント…クリスティーナ・岩田・ワイケナント

松浦 雄介「東日本大震災を記憶することの(不)可能性」

西村 大志「『安全・安心／安心・安全』の誕生」

清水 晶子「距離の操作と越境の拒絶」

須藤 遙子「自衛隊協力映画としての『シン・ゴジラ』」

被曝首都トーキョーにみるナシヨナリズム」

二〇一七年五月二八日

出口 康夫「代受苦と災後言説のタイポロジー」

北浦 寛之「ポスト3・11映画と震災の想起」

菅野 優香「『以後』のイメージ…少女という生きもの」

馬 然「演出するインタビュート、語る身体——『東北記

録映画三部作』を通じて想起する」

万国博覧会と人間の歴史

(研究代表者 佐野 真由子)

〔共同研究者名〕

井上 章一、稲賀 繁美、瀧井 一博、劉 建輝、林 洋

子、青木ルジラルデッリ 美由紀、ロバート・ヘリヤー、

石川 敦子、市川 文彦、岩田 泰、鵜飼 敦子、江原

規由、神田 孝治、澤田 裕二、寺本 敬子、中牧 弘
允、芳賀 徹、増山 一成、武藤 秀太郎、武藤 夕佳
里、橋爪 紳也

〔海外共同研究員名〕

青木 信夫、ウィーベ・カウテルト、シビル・ギルモンド、

徐 蘇斌

〔研究発表〕

〈第六回研究会〉

二〇一七年五月一三日

論集作成に向けた各自のテーマ案発表(各10分程度)と討論

当研究会の「来し方」について

二〇一七年五月一四日

前日の続き

〈第七回研究会〉

二〇一七年八月五日

橋爪 紳也「博覧会と都市開発」

青木ルジラルデッリ 美由紀「〈ここ近所〉と〈世界の果て〉

——万国博覧会とオスマン帝国人の世界観」

執行 昭彦(ゲストスピーカー)「万博における日本館の

変遷——日本は日本を海外にどう発信したか?」(森

誠一朗、岸田 匡平との共同発表

二〇一七年八月六日

亀井 修（ゲストスピーカー）「アントロポシーン（人の時代）」とは何か」

神田 孝治「沖縄国際海洋博覧会とツーリズム——モビリティに注目した考察」

〈第八回研究会〉

二〇一七年十一月一日

井上 さつき（ゲストスピーカー）「万博から見た国産ピアノの歩み」

武藤 夕佳里「Shippo—日本の七宝業と万国博覧会」

二〇一七年十一月二日

五月女 賢司（ゲストスピーカー）「1970年大阪万博前夜——「万国博を考える会」をめぐって」

増田 斎「「反博」闘争からみる大阪万博——キリスト教館というパビリオンの存在」

清水 寛之（ゲストスピーカー）「万国博覧会における来場者の経験と長期記憶——博物館学と認知心理学の接点」

〈第九回研究会〉

二〇一八年二月一七日

杓名 貴彦（ゲストスピーカー）「田中芳男と博覧会・博物館」

シビル・ギルモンド「ニュルンベルク金工万国博覧会（1885年）をめぐる複数の視点——ドイツ、フランス、日本、オランダ……」

ロバート・ヘリヤー「シカゴ「進歩の一世紀」万国博覧会（1933—1934年）——茶は反日感情を軟化させる手段として利用されたのか？（付・シアトル万博（1962年）、スポーケン万博（1974年）に関する研究プラン）」

次期論集、来年度以降の活動に関する打合せ（1）

二〇一八年二月一八日

青木 信夫「パナマ万博（1915年）と中国——その参加事情と中国館建設の意味」

徐 蘇斌「清末民初期における勸業場の成立と展開」

武藤 秀太郎「アスタナ万博中国館と「核」エネルギー」

次期論集、来年度以降の活動に関する打合せ（2）

差別から見た日本宗教史再考―社寺と王権に見られる聖と賤
の論理

〔研究代表者 磯前 順一〕

〔共同研究者名〕

マルクス・リュッターマン、石川 肇、鈴木 岩弓、吉村
智博、佐藤 弘夫、小倉 慈司、鈴木 英生、川村 覚
文、山本 昭宏、青野 正明、高柳 健太郎、田辺 明
生、菊田 真司、船田 淳一、太田 恭治、浅居 明彦、
水内 勇太、鍾 以江、佐々田 悠、寺戸 淳子、金沢
豊、西宮 秀紀、井上 智勝、舟橋 健太、鶴見 晃、河
井 信吉、上村 静、安部 智海、竹本 了悟、守中 高
明、関口 寛、岩谷 彩子、久保田 浩、吉田 一彦、小
田 龍哉

〔海外共同研究員名〕

トモエ・イレエネ・M・シユタイネツク、ラジ・C・シユ
タイネツク、ランジャナ・ムコバディヤヤー、ダニエル・
ボツマン、スーザン・L・バーンズ、酒井 直樹、和氣
直子、尹 海東、呉 佩珍、片岡 耕平

〔研究発表〕

〈第六回研究会〉

二〇一七年五月二〇日

河井 信吉・川村 覚文「磯前論文（安丸・金光教論）論
評」

司会…上村 静

コメント…磯前 順一

舟橋 健太「カースト論・「不可触民」論 素描」

司会…鍾 以江

コメント…片岡 耕平

〈第七回研究会〉

二〇一七年七月一五日

舟橋報告（第一回より継続討議）

イントロダクション…鍾 以江

司会…小田 龍哉

片岡 耕平「『日本中世の穢と秩序意識』に関する諸々」

司会…小倉 慈司

コメント…小田 龍哉

鈴木英生「メディアとタブー―マスコミと差別表現をめ
ぐって」

司会…山本 昭宏

コメント…青野 正明

〈第八回研究会〉

二〇一七年一〇月一四日

恵楓園DVD上映会

司会…鶴見 晃

糸山 公照（ゲストスピーカー）「宗教と差別と公共性」

司会…鶴見 晃

吉村 智博「『国民の物語』の解体 部落史の血統論・民

族論を超えて」

司会…佐々田 悠

コメント…吉田 一彦

〈第九回研究会〉

（所外開催 熊本県熊本市、合志市、益城町）

二〇一七年一二月二日

国立療養所菊池恵楓園見学

二〇一七年一二月三日

益城町・馬水仮設団地見学

〈第十回研究会〉

二〇一八年二月一七日

磯前 順一「被災の現場に立ち会うこと（1） 東日本大

震災の経験より」

司会…金澤 豊

荻田 真司（総括）・関口 寛・寺戸 淳子・安部 智海

「熊本調査旅行報告「被災の現場に立ち会うこと（2）」

司会…磯前 順一

論文集の目的について「差別、宗教、公共性をどう論じる

か」

聞き手…荻田 真司

話し手…磯前 順一

全体討議

論文集仮目次について

司会…吉村 智博

報告…各班の編者

来年度報告案について

司会…佐々田 悠

明治日本の比較文明史的考察―その遺産の再考―

（研究代表者 瀧井 一博）

〔共同研究者名〕

牛村 圭、ジョン・グリーン、佐野 真由子、大久保 健

晴、加藤 雄三、林 洋子、石上 阿希、古川 綾子、

五百旗頭 薫、岩谷 十郎、植村 和秀、大川 真、小川
原 正道、勝部 眞人、國分 典子、塩出 浩之、島田
幸典、清水 唯一朗、谷川 穰、永井 史男、長尾 龍
一、中村 尚史、福岡 万里子、前田 勉、松田 宏一
郎、山田 央子、岡本 貴久子、浅見 雅男、上野 景
文、今野 元、小林 道彦、内藤 一成、奈良岡 聰智、
楊 際開、柏居 宏枝、松沢 裕作、三谷 博、アミン・
ガティミ

〔海外共同研究員名〕

ハラルド・フース、アリスティア・スウェール

〔研究発表〕

〈第一一回研究会〉

二〇一七年四月一日

光平 有希「明治後期における呉秀三の音楽療法理論とそ
の思想的背景」

東郷 和彦（ゲストスピーカー）「戦後日本の思想的背景

敗戦・降伏・天皇制」

二〇一七年四月一日

松沢 裕作「森林管理からみる明治期行政の特質」

〈第一二回研究会〉

二〇一七年六月一日

佐藤 文隆（ゲストスピーカー）「歴史のなかの科学」

井上 章一「ソビエトとアメリカの明治維新―国際日本研
究の可能性―」

二〇一七年六月一日

長尾 龍一「日本近代史における文明と文化」

劉 雨珍「黄遵憲の見た明治日本」

〈第一三回研究会〉

二〇一七年七月二日

日文研所蔵貴重洋書見学会

野村 興兒（ゲストスピーカー）「歴史遺産とまちづくり

―明治150年を迎えるにあたって―」

二〇一七年七月二日

齊藤 紅葉（ゲストスピーカー）「木戸孝允と明治維新」

御厨 貴（ゲストスピーカー）「明治史研究臆断」

画像資料（絵葉書・地図・旅行案内・写真等）による帝国城

内文化の再検討」

（研究代表者 劉 建輝）

〔共同研究者名〕

北浦 寛之、井上 章一、稲賀 繁美、伊東 貴之、松田 利彦、石川 肇、根川 幸男、前川 志織、蔡 敦達、安 藤 潤一郎、井村 哲郎、岡本 貴久子、上垣外 憲一、岸 陽子、小林 茂、小林 善帆、呉 孟晋、白幡 洋三郎、姜 克実、鈴木 貞美、戦 晓梅、单 援朝、塚瀬 進、鳥谷 まゆみ、仲 万美子、松宮 貴之、森田 憲 司、李 相哲、劉 岸偉、森 洋久

〔海外共同研究員名〕

王 中忱、孫 江、徐 興慶、呉 京煥、陳 凌虹、鄭 在貞、王 确

〔研究発表〕

〈第八回研究会〉

二〇一七年八月四日

劉 雨珍「筆談資料から見る明治前期の中日文化交流」

单 荷君「ドイツ統治下の青島における日本人社会の誕生

(1897~1914)」

二〇一七年八月五日

潘 光哲「デジタルデータベースの可能性―胡適を例とし

て」

〈第九回研究会〉

二〇一七年二月二二日

宋 琦「帝国の視野における熱河―避暑山荘および外八廟を現場として」

石川 肇「鳥瞰図から見た帝国―『大正の広重』吉田初三郎の描いた内外地」

二〇一七年二月二三日

劉 建輝『支那服』という画題の成立―近代日本人画家がいかに中国女性を描いてきたか―

〈第一〇回研究会〉

二〇一八年三月二日

嘉本 伊都子「帝国域内におけるインターマリッジと国際結婚…パラオ人女性と内地人男性の「婚姻」をめぐる

一考察」

沈 潔(ゲストスピーカー)「『満洲』の都市化と女性生活の記憶」

趙 軍(ゲストスピーカー)「『日本帝国』にとしての『満洲』、『満洲』にとしての『日本帝国』――歴史教科書としての写真集を語る」

崔 博光(ゲストスピーカー)・王 中忱・周 閱(ゲストスピーカー)・田中 寛(ゲストスピーカー)・南

誠（ゲストスピーカー）・伊月 知子（ゲストスピーカー）・李 偉（ゲストスピーカー）『満洲』生活の記憶に関する総合討論」

二〇一八年三月三日

仲 万美子「大連の娯楽空間とところどころ——和物／洋物

ライブ祝聴・鑑賞の場のあり方」

吳 京煥「閔野貞と朝鮮」

植民地帝国日本における知と権力

（研究代表者 松田 利彦）

〔共同研究者名〕

瀧井 一博、稲賀 繁美、劉 建輝、飯島 渉、岡崎 まゆみ、小野 容照、加藤 聖文、加藤 道也、河原林 直人、川瀬 貴也、栗原 純、愼 蒼健、通堂 あゆみ、春山 明哲、松田 吉郎、宮崎 聖子、やまだ あつし、長沢 一恵、李 昇燁、中生 勝美

〔海外共同研究員名〕

陳 延媛、李 炯植、洪 宗郁、山本 淨邦（邦彦）、宋炳卷、鄭 駿永、顔 杳如、吳 叡人、何 義麟

〔研究発表〕

〈国際研究集会「植民地帝国日本における知と権力」〉

二〇一七年一〇月一三日

基調報告：松田 利彦

Session 1 植民地留学生と知の環流

司会：洪 宗郁

鄭 鐘賢「戦後」東京帝国大学留学生の進路と帝国の知の連続・非連続——李萬甲、權重輝、崔應錫等の事例を中心に」

紀 旭峰「植民地台湾からの「留学生」郭明昆——知の構築と実践を中心に」

コメント：通堂 あゆみ、鄭 駿永

二〇一七年一〇月一四日

Session 2 技術者・技術官僚の知

司会：宮崎 聖子

谷川 竜一「1930年代の朝鮮半島における水力発電所

建設技術と建設体制」

蔡 龍保「日治時期台湾総督府の技術官僚の出自とその活

動の分析——土木官僚を例として」

コメント：やまだ あつし、李 炯植

Session 3 植民地と法

司会…中生 勝美

曾 文亮「日治時期における台湾人家族法と植民地統合問題」

國分 典子「植民地支配期における韓国近代憲法思想の展開」

コメント…春山 明哲、岡崎 まゆみ

二〇一七年一〇月一五日

Session 4 植民地と医学

司会…栗原 純

ホイアン・キム「『在朝日本人医師』を概念的に解体する…集団伝記学的な基礎分析」

朴 潤栽「白鱗濟の近代認識と自由主義」

劉 士永「日本の植民地医学から東アジア国際保健機構へ」

コメント…慎 蒼健、陳 延媛

閉会の挨拶…松田 利彦

東西文明論―日本を東西の中間地として、懸け橋という特殊な使命を与える言説の分析

(研究代表者 デイック・ステゲウエルンス)

〔共同研究者名〕

細川 周平、ジョン・ブリーン、楠 綾子、瀧井 一博、松田 宏一郎、奈良岡 聰智、野島 陽子、中西 寛、宇野田 尚哉、米谷 匡史、山口 輝臣、五百旗頭 薫、福家 崇洋、伏見 岳人、ベッカ・コーホナン、トルステン・ヴェーバー

〈第一回研究会〉

二〇一七年一月一八日

デイック・ステゲウエルンス「東西文明論とは？―文明論、脱亜論、アジア主義、日本人的使命観、東西文明

融合・調和論、日本人論、橋渡し役としての日本、日

本文明論、日本的近代思考構造 等々」

宇野田 尚哉「浮田和民・『太陽』と東西文明論」

二〇一七年一月一九日

松田 宏一郎「Oriental Despotism は東洋文明の不可欠の要素か？」

〈第二回研究会〉

二〇一八年一月二〇日

細川 周平「和洋調和楽 東西文明論に脇目を向けて」

デイック・ステゲウエルンス「研究会代表による今までの研究成果(オスロ大会など)の俯瞰・研究員による各

自報告の位置づけ

楠 綾子「1950年代の東西文明論」

〈第三回研究会〉

二〇一八年三月一七日

松田 宏一郎「天譴と文明—文明論言説としての「天」と災害」

福家 崇洋「樽井藤吉におけるアジア主義と社会主義の交渉」

二〇一八年三月一八日

米谷 匡史「植民地朝鮮／帝国日本の「世界史の哲学」と

「東洋」言説」

〈基幹共同研究〉

戦後日本文化再考

〔研究代表者 坪井 秀人〕

〔共同研究者名〕

磯前 順一、郭 南燕、北浦 寛之、石川 肇、増田 斎、田村 美由紀、杉田 智美、長瀬 海、浅野 麗、石川 巧、岩崎 稔、大原 祐治、岡田 秀則、辛島 理人、狩俣 真奈、川口 隆行、北中 淳子、北原 恵、木

村 朗子、紅野 謙介、高 榮蘭、五味洸 典嗣、斉藤 綾子、佐藤 泉、尹 芷汐、塩野 加織、島村 輝、申 知瑛、菅野 優香、鈴木 勝雄、張 政傑、長 志珠絵、十重田 裕一、鳥羽 耕史、戸邊 秀明、成田 龍一、野上 元、朴 貞蘭、橋本 あゆみ、福岡 良明、松原 洋子、水川 敬章、光石 亜由美、美馬 達哉、村上 陽子、李 承俊、鷺谷 花、渡辺 直紀、渡邊 英理、沈 熙燦

〔研究発表〕

〈第一二回研究会〉

〔所外開催 立教大学〕

二〇一七年四月一五日

狩俣 真奈「坂口安吾の戦後作品の肉体に見る〈主体のゆらぎ〉——「白痴」「戦争と一人の女」を中心に——」

長 志珠絵「脱「兵曹文化」への模索——軍港都市・佐世

保にみる占領と駐留のはざま——」

二〇一七年四月一六日

パネル発表「〈長い戦後〉のナシヨナリズム——ナシヨナリズムの変貌を考える」

パネル趣旨説明・佐藤 泉

佐藤 泉「ナシヨナリズム、アジア主義、近代の超克——

竹内好・花田清輝・谷川雁らの議論から」

長瀬 海「江藤淳におけるナシヨナリズム——「第三の新人」・「母」・「近代以前」

増田 斎「遠藤周作『沈黙』と宗教ナシヨナリズムの関係

——大阪万国博覧会を視座にして——

尹 芷汐「喚起されるノスタルジアとナシヨナリズム——映画『人間の証明』と西條八十「ぼくの帽子」

〈第一三回研究会〉

二〇一七年六月一八日

（所外開催 立教大学）

パネル発表「占領期メディア規制と出版文化 プランゲ文庫と岩波書店での調査を中心に」

尾崎 名津子（ゲストスピーカー）、塩野 加織、十重田

裕一

野上 元「東京裁判論の「爆発」——1970／80年代を中心に」

福岡 良明「高度成長と「遺族への配慮」の拒絶——映画『軍旗はためく下に』における「記憶」の「仁義なき戦い」

〈第一四回研究会〉

二〇一七年八月二〇日

パネル発表「『運動』と文化」

パネル趣旨説明『戦後日本を読みかえる』……川口 隆行

川口 隆行「二つの「戦後」文化運動——詩人四國五郎の軌跡」

島村 輝「山村を揺るがした「ダンス至上主義」——「静

かなる山々」と戦後日本共産党の文化運動」

奥村 華子「1960年前後における三池炭鉱の運動と記憶」

橋本 あゆみ「大西巨人の文学／運動の支柱としての「法

感情」——一九七〇年代前半における障害者の教育をめぐる運動と『神聖喜劇』

〈第一五回研究会〉

二〇一七年一二月二日

パネル発表「セクシュアリティの戦後——〈出来事〉をめぐる想像力と欲望」

パネル趣旨説明……光石 亜由美

河原 梓水「ビキニ事件と人種差別のエロス化——『奇譚クラブ』の日本人畜化小説群から——」

田村 美由紀「核の時代における男性性へのまなざし——性的不能の表象をめぐる」

服部 徹也「日本エイズ文学論への補遺——『熊夫人の告白』を中心に」

〈国際研究集会「戦後日本文化再考」〉

二〇一八年三月二日

所長挨拶…小松 和彦

開会の辞…坪井 秀人「戦後日本文化再考」を再考する」
基調講演…キャロル・グラック「*Sengomatsu and the Arc of Modernity*」

討論…デイスカッサント…五十嵐 恵邦

二〇一八年三月三日

パネルデイスカッション

シュテフィ・リヒター「“Now-time”, “Tiger’s leap” (Benjamin) and “Post-(post)war Japan”: Some notes 「今時」 「虎の跳躍」(ベンヤミン)と「(ポスト)戦後日本」: 再考ノート」

デイスカッサント…戸邊 秀明、申 知瑛、鷺谷 花

志弦「“Apologetic Juxtaposition: Maksymilian Kolbe-A Polish Catholic Martyr in Auschwitz and the Japanese

Hibakusha Martyrdom in Nagasaki」

デイスカッサント…辛島 理人、朴 貞蘭、李 承俊

酒井 直樹「*Theory and Anthropological Difference: Toward a Minor Politics of Area Studies*」

デイスカッサント…斉藤 綾子、沈 熙燦、張 政傑
成田 龍一「近代のなかの「戦後」／「戦後」のなかの明治——「維新150年」と「戦後70年」のあいだ」

デイスカッサント…石川 巧、尹 芷汝、橋本 あゆみ
ラウンドテーブル
司会…坪井 秀人

比較のなかの東アジアの王権論と秩序構想——王朝・帝国・国家、または、思想・宗教・儀礼——

(研究代表者 伊東 貴之)
〔共同研究者名〕

倉本 一宏、井上 章一、瀧井 一博、ジョン・ブリー
ン、松田 利彦、劉 建輝、榎本 渉、フレデリック・ク
レインス、マルクス・リュッターマン、佐野 真由子、山
村 奨、佐藤 將之、青木 隆、新井 菜穂子、井上 厚
史、恩田 裕正、垣内 景子、橋川 智昭、権 純哲、小

島 毅、関 智英、末木 文美士、銭 国紅、竹村 英
 二、竹村 民郎、田尻 祐一郎、土田 健次郎、永富 青
 地、西澤 治彦、長谷部 英一、林 文孝、松下 道信、
 水口 拓寿、横手 裕、李 梁、吾妻 重二、新田 元
 規、石井 剛、伊藤 聡、井ノ口 哲也、内山 直樹、遠
 藤 基郎、大久保 良峻、苅部 直、黒岩 高、岸本 美
 緒、児島 恭子、近藤 成一、佐々木 愛、杉山 清彦、
 高柳 信夫、葭森 健介、保立 道久、李 曉東、本間
 次彦、松野 敏之、石川 洋、澤井 啓一、渡邊 義浩、
 前田 勉、渡辺 美季、平野 千果子、中 純夫、古勝
 隆一、茂木 敏夫、重田 みち、周 圓、田口 由香、豊
 田 裕章

〔海外共同研究員名〕

張 啓雄、葛 兆光、手島 崇裕、ベンジャミン・A・エ
 ルマン

〈第六回研究会〉

二〇一七年五月二〇日

橘川 智昭「新詠唯識宗の形成について」
 永富 青地「反キリスト教文献集『破邪集』の出版とその
 影響について」

近藤 成一「天皇の譲位と院政——鎌倉時代を中心に——」
 〈第七回研究会〉

二〇一七年七月二十九日

深川 真樹（ゲストスピーカー）『春秋繁露』の郊祀論
 工藤 卓司（ゲストスピーカー）「前漢の「胎教」の思想
 とその政治的意義」

末永 高康（ゲストスピーカー）「礼経の理念と現実——前
 漢廟制論議における」

二〇一七年七月三〇日

佐藤 將之「礼治思想の形成とその思想的ダイナミズム」
 渡邊 義浩「『漢書』が描く在るべき「古典中国」像」

〈第八回研究会〉

二〇一七年十一月四日

（所外開催 早稲田大学）
 国史跡・林氏墓の見学

遠藤 基郎「過差の権力論——鎌倉時代後期篇」
 末木 文美士「王権と神仏——日本思想史の構造」

〈第九回研究会〉

二〇一八年一月二七日

重田 みち「世阿弥能楽論に見る道学の反映——藝道思想の

画期としての足利義持政権期

伊藤 聡「三輪流神道の形成―密教法流から神道流派へ」

吾妻 重二「荻生徂徠における儒教儀礼の解体」

〈第一〇回研究会〉

二〇一八年二月二四日

〔所外開催 根津育英会・武蔵大学〕

黒岩 高「伝統の再生と創成——中国ムスリムの書法」

並びに、中国ムスリム書道作品（ムスリム書法家・馬

国鋒、馬継勝の両氏の作品を中心に）の内覧とデモン

ストレーションDVD（馬継勝氏）の視聴」

西澤 治彦「蘇北におけるプロテスタントの布教活動——

アブサラム・サイデンストリッカーを中心に」

多文化交渉における『あいだ』の研究

〔研究代表者 稲賀 繁美〕

〔共同研究者名〕

榎本 渉、郭 南燕、フレデリック・クレインス、宮崎

康子、石川 肇、杉田 智美、春藤 献一、片岡 真伊、

古川 綾子、根川 幸男、今泉 宜子、林 洋子、青木 Ⅱ

ジラルデッリ 美由紀、メーガン・ジョーンズ、バート・

ウインザー・タマキ、ニコラ・フィエヴエ、鶴戸 聡、江

口 久美、大西 宏志、岡本 光博、小川 さやか、隠岐

さや香、小倉 紀蔵、金子 務、九里 文子、鞍田 崇、

近藤 高弘、申 昌浩、鈴木 洋仁、莊 千慧、滝澤 修

身、武内 恵美子、竹村 民郎、多田 伊織、千葉 慶、

テレングト・アイトル、戸矢 理衣奈、中村 和恵、長

門 洋平、西原 大輔、二村 淳子、朴 美貞、橋本 順

光、範 麗雅、平松 秀樹、平芳 幸浩、藤原 貞朗、へ

レナ・チャブコヴァー、堀 まどか、松嶋 健、三原 芳

秋、マシュー・ラーキング、山本 麻友美、村中 由美

子、林 久美子、森 洋久

〔海外共同研究員名〕

デンニツァ・ガブラコヴァ、近藤 貴子、ミツヨ・デル

クル・糸永

〈第七回研究会〉

二〇一七年六月二三日

テーマⅠ…洞窟から「あいだ」を考える

趣旨説明…稲賀 繁美

今泉 宜子「洞窟の身体―なぜ、穴に惹かれるのか」

港 千尋（ゲストスピーカー）「原初のあいだ…洞窟の想

像力

討論・港×稲賀 繁美 のち 全体討論

二〇一七年六月二四日

テーマⅡ…手の思想と触の世界

金子 務「手の思想と触の世界」

質疑応答

〈第八回研究会〉

二〇一七年七月七日

テーマⅠ…〈あいだ〉としての地域医療——べてるの家

の実践から考える

導入…三原 芳秋

松嶋 健「海と冗長性」イタリアにおける地域精神保健を

めぐって」

向谷地 生良（ゲストスピーカー）「べてるの家」という

〈あいだ〉」

全体討論

二〇一七年七月八日

テーマⅡ…現代史研究における「あいだ」の問題——職場の

歴史をつくる会に関連して

古川 誠（ゲストスピーカー）「職場の歴史の社会的・文

化的意味

竹村 民郎「歴史学における「あいだ」の研究について

——職場の歴史をつくる会に関連して——

質疑応答

〈第九回研究会〉

二〇一七年七月三〇日

テーマⅠ…文化間翻訳の現場——言語内翻訳の場合

片岡 真伊「日本近代文学の英訳現場にみる」あいだ“の

諸相」

村中 由美子「〈あいだ〉の作家、マルグリット・ユルス

ナールと『源氏物語』

全体討論

二〇一七年七月三一日

青木リジラルデッリ 美由紀「〈あいだ〉の都市、〈あい

だ〉の芸術家」イスタンブールのパリ人、レオン・パル

ヴィツレと仕事の周辺」

ミツヨ・デルクル・糸永「日本の「包む」文化と空間性

について」

多田 伊織「コレクターの衰退 断捨離・生前整理と身辺

の文化」

質疑応答

〈第一〇回研究会〉

二〇一七年九月二五日

テーマⅠ…芸術と社会組織のあいだ——インド、中国、日

本

ヘレナ・チャブコヴァー「シュリー・オーロビン・アー

シラム——アートと生活の間」

莊 千慧「神智学徒H・P・シャーストリ（1882—

1956）のアジア滞在——靈性運動とコロニアリズ

ムのあいだ」

堀 まどか「境界者の文芸と民族運動のあいだ——ヨネノ

グチと中印の詩人」

総合討論

二〇一七年九月二六日

テーマⅡ…「長崎料理——和・華・蘭——」

滝澤 修身「長崎料理——和・華・蘭——」

討論

戦争と鎮魂

〔研究代表者 牛村 圭〕

〔共同研究者名〕

ジョン・ブリーン、稲賀 繁美、倉本 一宏、松田 利

彦、劉 建輝、磯前 順一、郭 南燕、西田 彰一、南

直子、今泉 宜子、鄭 相哲、白石 恵理、岩崎 徹、大

東 和重、加藤 めぐみ、川村 覚文、川本 玲子、栗原

俊雄、古田島 洋介、小堀 馨子、佐伯 順子、谷口 幸

代、竹村 民郎、等松 春夫、永井 久美子、西原 大

輔、眞嶋 亜有、竹ノ内 文美、吉田 優貴、末木 文美

士、堀 まどか、朴 美貞、平松 隆円

〔海外共同研究員名〕

ケビン・ドーク、エヤル・ベン・アリ、徐 載坤、金 志映

〔第四回研究会〕

二〇一七年八月二三日

古田島 洋介「能「鎮魂」鑑賞記」

竹ノ内 文美「胡桃澤盛日記からみる戦争と鎮魂」

二〇一七年八月二四日

末木 文美士「告発し、和解する死者」

〔第五回研究会〕

二〇一七年二月一六日

〔所外開催 明治神宮社務所講堂〕

小堀 桂一郎（ゲストスピーカー）「兵士の靈を祀る傳統の發祥」

コメント…等松 春夫

二〇一七年二月一七日

〔所外開催 聖徳記念絵画館会議室〕

今泉 宜子「聖徳記念絵画館設立過程と戦争画の位置」

落合 則子（ゲストスピーカー）「川村清雄の構想画と鎮

魂―《振天府》の制作をめぐる―」

〈第六回研究会〉

二〇一八年三月一八日

研究成果刊行物について―予定原稿のテーマなど

岩崎 徹「シェイクスピアの英国史劇における「戦争と鎮

魂」―『ヘンリー5世』を中心に―」

全体討論

二〇一八年三月一九日

西田 彰一「寛克彦の戦争と鎮魂」

全体討論

近代東アジアの風俗史

〔研究代表者 井上 章一〕

〔共同研究者名〕

劉 建輝、北浦 寛之、石川 肇、斎藤 光、申 昌浩、

永井 良和、西村 大志、濱田 陽、李 珣淑

〈第一回研究会〉

二〇一七年一月四日

井上 章一「魂の風俗史―私はなぜこの問題にこだわるのか」

全員「次年度以降、研究会をどうすすめるか」

二〇一七年一月五日

井上 章一「裸体美術の比較東アジア史」

劉 建輝「チャイナドレスから見えること」

〈第二回研究会〉

二〇一八年三月一〇日

斉藤 光「モダンガールの1920年代」

石川 肇「モボの生態」

二〇一八年三月一日

申 昌浩「両大戦間期の新女性」

嘉本 伊都子「なぜ花嫁は、海をわたったのか」

（文責…研究協力課）

基礎領域研究

英文日本歴史研究書講読（新規）

代表者 牛村 圭

概要 達意の英語で書かれた日本史研究書を素材に、英文を正しく読み、自然な日本語にする手法の修得を目指す。

中世文学講読（継続）

代表者 荒木 浩

概要 中世文学の影印本の読解を軸に、古典テキストの研究方法を考察する。

韓国語の運用（継続）

代表者 松田 利彦

概要 研究その他の業務で韓国語を必要とするものに対し、会話、読解、聴解の習得を目指した授業を行う。

古記録学基礎研究（継続）

代表者 倉本 一宏

概要 日本前近代の根幹的史料である古記録の解読を、原本や写本の見方・扱い方も含めて考えていく。

フランス語基礎運用（初級）（継続）

代表者 稲賀 繁美

概要 初心者を対象として、初歩の運用能力を実践的に身に付ける。教科書としては当該年度のNHKラジオ講座教材の準備を参加者各自に願う。他の教材は現場で提供する。

フランス語読解補助・論文作成指南（中級）（継続）

代表者 稲賀 繁美

概要 中級以上の実務能力開発、論文作成の手ほどきをする。教材については、受講生との相談のうえで決定する。

文学・文化史理論入門（継続）

代表者 坪井 秀人

概要 文学および文化史に関する基礎的な理論を学びながらテキストの読解・分析の実践的方法を修得する。

近現代史料文献研究（継続）

代表者 瀧井 一博

概要 日本近現代史の基礎史料と古典的および先端的な文献を講読し、社会科学的な歴史研究の方法と実践を討究する。

彙報

(平成二九年四月一日)

平成三〇年三月三十一日

人事異動

●平成二九年四月一日 採用

教授 安井 眞奈美

機関研究員 根川 幸男

機関研究員 稲垣 智恵

技術補佐員 西田 彰一

技術補佐員 堀井 佳代子

技術補佐員 小川 仁

●平成二九年四月一日 昇任

教授 マルクス・リュッターマン

●平成二九年四月一日 配置換

総合情報発信室教授 ジョン・グリーン

●平成二九年四月一日 契約

(特任研究員)

特任助教 前川 志織

(客員)

外国人研究員 ゴ・フォン・ラン(ベトナム

社会科学アカデミー東北アジア研究所・日

本研究センター所長)

外国人研究員 潘 光哲(台湾中央研究院

近代史研究所研究員)

外国人研究員 佐藤 将之(国立台湾大学教

授)

外国人研究員 金 容儀(全南大学校日本文

化研究センター所長/教授)

●平成二九年四月一日 契約更新

(特任研究員)

特任助教 石上 阿希

特任助教 古川 綾子

●平成二九年四月一日 委嘱

(客員)

教授 鈴木 岩弓(東北大学総長特命教授)

教授 中原 ゆかり(愛媛大学教授)

准教授 伊藤 慎吾(学習院女子大学非常勤

講師)

准教授 永崎 研宣(人文情報学研究所主席

研究員)

准教授 山本 忠宏(神戸芸術工科大学芸術

工学部まんが表現学科助教)

准教授 吉村 智博(大阪市立大学非常勤講

師)

●平成二九年六月一日 契約

(客員)

外国人研究員 青木リジラルデッリ 美由紀

(イスタンブール工科大学非常勤准教授補)

●平成二九年六月三〇日 契約満了

(客員)

外国人研究員 バーバラ・ハートリー(タス

マニア大学校上級講師)

●平成二九年七月一日 契約

(客員)

外国人研究員 ハサン・カマル・ハルブ(エ

ジプト国立カイロ大学准教授)

●平成二九年七月三十一日 任期満了退職

准教授 郭 南燕

●平成二九年八月一日 採用

機関研究員 郭 南燕

◎平成二九年八月一日 契約

(客員)

外国人研究員 デイック・ステゲウエルン

(ノルウェー国立オスロ大学准教授)

◎平成二九年八月二二日 契約満了

(客員)

外国人研究員 李 済滄 (南京師範大学副教

授)

外国人研究員 鄭 相哲 (韓国外国語大学校

教授)

外国人研究員 劉 雨珍 (南開大学外国語学

院教授)

外国人研究員 ワダ・マルシアーノ・ミツヨ

(カールトン大学教授)

外国人研究員 青木リジラルデッリ 美由紀

(イスタンブール工科大学非常勤准教授補)

◎平成二九年九月一日 契約

(客員)

外国人研究員 潘 世聖 (華東師範大学教授)

外国人研究員 周 耘 (武漢音楽学院音楽学

学部学部長／教授)

外国人研究員 鄭 巨欣 (中国美術学院教授)

◎平成二九年九月三〇日 契約満了

(客員)

外国人研究員 チャン・ティ・チュン・トアン

(ハノイ大学日本語学部学部長／准教授)

外国人研究員 潘 光哲 (台湾中央研究院近

代史研究所研究員)

外国人研究員 佐藤 将之 (国立台湾大学教

授)

◎平成二九年一〇月一日 採用

助教 吉江 弘和

助教 白石 恵理

プロジェクト研究員 木場貴俊

◎平成二九年一〇月一日 契約

(客員)

外国人研究員 蔡 敦達 (上海杉達学院(大

学)教授)

外国人研究員 ピーター・ザロー (コネチ

カット大学教授)

外国人研究員 ロバート・ヘリヤー (ウェイ

ク・フォレスト大学准教授)

◎平成二九年一〇月三十一日 契約満了

(客員)

外国人研究員 葛 継勇 (鄭州大学 副教授)

◎平成二九年一二月一日 契約

(客員)

外国人研究員 ローレンス・マルソー (オー

kland大学上級講師)

◎平成二九年一二月三十一日 契約満了

(客員)

外国人研究員 バート・ウインザー・タマキ

(カリフォルニア大学アーバイン校教授)

◎平成三〇年一月三十一日 契約満了

(客員)

外国人研究員 ニコラ・フィエヴェ (高等研

究実習院教授)

◎平成三〇年三月二八日 契約

(客員)

外国人研究員 孫 春日 (延辺大学校 教授)

◎平成三〇年三月三十一日 転出

京都大学大学院教育学研究科教授 佐野 真

由子

◎平成三〇年三月三十一日 任期満了退職
助教 北浦 寛之

機関研究員 今井 秀和

機関研究員 小園 晃司

機関研究員 郭 南燕

技術補佐員 宮崎 康子

◎平成三〇年三月三十一日 契約満了

(客員)

外国人研究員 ゴ・フォン・ラン (ベトナム

社会科学アカデミー東北アジア研究所・日

本研究センター所長)

外国人研究員 金 容儀 (全南大学校日本文

化研究センター所長/教授)

外国人研究員 鄭 巨欣 (中国美術学院教

授)

外国人研究員 ロバート・ヘリヤー (ウェイ

ク・フォレスト大学准教授)

◎平成三〇年三月三十一日 委嘱期間満了

(客員)

教授 小川 順子 (中部大学人文学部コミュ

ニケーション学科教授)

教授 真鍋 昌賢 (北九州市立大学文学部教
授)

教授 長田 俊樹 (総合地球環境学研究所名

誉教授)

准教授 今泉 宣子 (明治神宮国際神道文化

研究所主任研究員)

准教授 大久保 健晴 (慶應義塾大学法学部

准教授)

准教授 林 洋子 (文化庁芸術文化調査官)

日文研フォーラム

第三〇九回「平成二九年四月一日(火)」

発表者 官 文娜 (香港中文大学アジア太平

洋研究所名誉研究員/日文研外国人研究

員)

テーマ 着衣改造の近代——わが母の服装観

から見る日中衣装変遷史

コメンテーター 井上 章一教授

第三一〇回「平成二九年五月九日(火)」

発表者 鄭 相哲 (韓国外国語大学校教授/

日文研外国人研究員)

テーマ 三つの「赤い」と二つの「寒い」か
ら、方言を考える——方言と言語類型論の
出会い

コメンテーター 千田 俊太郎 (京都大学文

学研究科准教授)

第三一一回「平成二九年六月一三日(火)」

発表者 劉 雨珍 (南開大学外国語学院教授

/日文研外国人研究員)

テーマ 筆談で見る明治前期の中日文化交流

コメンテーター 劉 建輝 副所長

第三一二回「平成二九年七月二五日(火)」

発表者 青木 ヨシラル デリ 美由紀 (イス

タンブル工科大学非常勤准教授補/日文研

外国人研究員)

テーマ 明治の建築家 伊東忠太 オスマン

帝国土産話

コメンテーター 井上 章一教授

第三一三回「平成二九年九月一二日(火)」

発表者 葛 継勇 (鄭州大学アジア太平洋研

究センター所長・教授/日文研外国人研究

員)

テーマ 千二百年前の文化交流——入唐日本人の生活と交友

コメンテーター 田中 史生（関東学院大学教授）、山内 晋次（神戸女子大学教授）、榎本 渉准教授

第三一四回「平成二九年一〇月一〇日（火）」
発表者 ゴ・フォン・ラン（ベトナム社会科学アカデミー東北アジア研究所・日本研究センター所長／日文研外国人研究員）

テーマ 日本とベトナムのコミュニケーション文化——「出会い」と「別れ」の挨拶、「ほめ」と「断り」の発話行為を中心に
コメンテーター 伊藤 哲司（茨城大学教授）

第三一五回「平成二九年一一月一四日（火）」
発表者 ニコラ・フィエヴェ（フランス国立高等研究実習院（BHE）歴史学・文献学学科教授／日文研外国人研究員）

テーマ 桂離宮の地霊（ゲニウス・ロキ）——近世の庭園における古代の神話と文化
コメンテーター 稲賀 繁美副所長

第三一六回「平成二九年一二月一二日（火）」
発表者 ロバート・ヘリヤー（ウェイク・フォレスト大学歴史学科准教授／日文研外国人研究員）

テーマ 「Japan Teaブランド」の構築——太平洋を渡った緑茶
コメンテーター 熊倉 功夫（MIHO MUSEUM館長）

第三一七回「平成三〇年一月九日（火）」
発表者 金 容儀（全南大学校日本文化研究センター所長／日文研外国人研究員）

テーマ 観音さまを抱きしめる——西国三十三所巡礼の旅
コメンテーター 荒木 浩教授

第三一八回「平成三〇年二月一三日（火）」
発表者 周 耘（武漢音乐学院教授／日文研外国人研究員）

テーマ 悠久なる郷（ふるさと）の響き——黄檗声明の中国的要素
コメンテーター 細川 周平教授
第三一九回「平成三〇年三月一三日（火）」

発表者 ハサン・カマル・ハルブ（エジプト国立カイロ大学文学部准教授／日文研外国人研究員）

テーマ 明治の人々を科学に導いた福澤諭吉の絵入り教科書——『訓蒙窮理図解』をもとく

コメンテーター 瀧井 一博教授、石上 阿希特任助教

木曜セミナー

第二三六回「平成二九年四月二〇日（木）」

発表者 荒木 浩教授
テーマ 周回する日本研究——海外での古典教育とそのロード——

コメンテーター マルクス・リュッターマン教授

第二三七回「平成二九年五月二五日（木）」

発表者 根川 幸男機関研究員
テーマ 顔の見えるグローバルヒストリーへ——移民史研究からの試み——

コメンテーター 細川 周平教授

第二三八回「平成二九年六月二二日（木）」

発表者 竹田 明敬（日文研資料課係長／天

之武産合氣塾道場指導員・合氣道五段）

テーマ 合氣道とその理念（演武あり）―内

弟子生活で得たもの―

第二三九回「平成二九年七月二〇日（木）」

発表者 安井 眞奈美教授

テーマ 出産の怪―妖怪画を中心に

コメンテーター 飯倉 義之（國學院大学准

教授）

第二四〇回「平成二九年九月二一日（木）」

発表者 前川 志織特任助教

テーマ チョコレートの喻えとしての「少

女」――1930年代の森永ミルクチョコ

レート広告をてがかりに

コメンテーター 稲賀 繁美副所長

第二四一回「平成二九年一〇月一九日（木）」

討論者 井上 章一教授、倉本 一宏教授、

瀧井 一博教授、坪井 秀人教授

テーマ 日文研の30年を読み比べる―『新・

日本語誕生』、『鼎談「日文研問題」をめ

ぐって』、『日文研が若かったころ』―

第二四二回「平成二九年一一月二二日（水）」

発表者 小園 晃司機関研究員

テーマ 華語における非言語情報の文字化現

象―日本漫画のうちに再発見された表現形

式の可能性―

第二四三回「平成二九年一二月二一日（木）」

発表者 奥村 昭夫（デザイナー）

テーマ デザインの今

コメンテーター 古川 綾子特任助教

第二四四回「平成三〇年一二月二五日（木）」

発表者 白石 恵理助教

テーマ 「夷酋列像」というメディア

コメンテーター 田島 達也（京都市立芸術

大学教授）

第二四五回「平成三〇年二月二二日（水）」

発表者 吉江 弘和助教

テーマ 森友学園と教育勅語―「戦前教育へ

の回帰」という戦後史―

コメンテーター ネイスン・ホブソン（名古屋

屋大学准教授）

Nichibunken Evening Seminar

第二一六回「平成二九年四月六日（木）」

発表者 ナタリー・クロロ・ブコヴァ（チャ

イコフスキー・モスクワ音楽大学院「世界

の音楽文化センター」助手／日文研外来研

究員）

テーマ Japanese Orthodox Chanting: A Brief

History and Present-day Conditions

第二一七回「平成二九年五月一一日（木）」

発表者 バート・ウィンザー・タマキ（カリ

フォルニア大学アーバイン校教授／日文研

外国人研究員）

テーマ TSUCHI: Japanese Earth and Soil in

Pottery, Photography, and Installation Art,

1960-2000

第二一八回「平成二九年六月八日（木）」

発表者 メーガン・ジョーンズ（アルフレッ

ド大学美術史助教授／日文研外来研究員）

テーマ The Ontology and Icon Formation of

the Tea Bowl

第二一九回「平成二九年七月六日（木）」

発表者 ジョン・ロブレグリオ（オクス
フォードブルックス大学助教授／日文研外
来研究員）

テーマ Interwar Japanese Buddhism and Racial
Prejudice

第二二〇回「平成二九年九月七日（木）」

発表者 ロバート・ヘリヤー（ウェイク・
フォレスト大学准教授／日文研外来研究
員）

テーマ Japanese Green Tea as an American
Beverage, 1860 to 1940

第二二一回「平成二九年一〇月五日（木）」

発表者 ギャリー・ヒッキー（オーストラリ
ア国立図書館日本研究員／日文研外来研究
員）

テーマ Meiji Period *Kuchie* (口絵) in The
National Library of Australia Collection

第二二二回「平成二九年一二月二日（木）」

発表者 ニコラ・フィエヴェ（フランス国立
高等研究実習院（EPHE）歴史学・文献学

学科教授／日文研外国人研究員）

テーマ *Betsugō* 別荘, *Bessō* 別荘 and *Sansō*
山荘 in Medieval and Premodern Kyoto —
From an Architectural Point of View

第二二三回「平成二九年一二月七日（木）」

発表者 将基面 貴巳（オタゴ大学人文学部
歴史学科教授／歴史学科長）

テーマ The Making of Patriotism in Early
Meiji Japan

第二二四回「平成三〇年二月八日（木）」

発表者 ビーター・ザロー（コネチカット大
学教授／日文研外国人研究員）

テーマ Constructing Chinese Citizens: Text-
books and the Nation, with a Note on Japanese
Influences (1902-1937)

第二二五回「平成三〇年三月七日（水）」

発表者 デイック・ステゲウェルンス（ノル
ウェー国立オスロ大学准教授／日文研外国
人研究員）

テーマ Postwar Japanese War Films: The
Continuing Competition for Japan's Collec-

tive War Memory

学術講演会

第六五回「平成二九年九月二六日（火）」

講演者 大塚 英志教授

テーマ 柳田國男と日本国憲法——主権者教
育としての柳田民俗学

講演者 呉座 勇一助教

テーマ 内藤湖南、応仁の乱を論じる

司 会 坪井 秀人教授

第六六回「平成三〇年三月一六日（金）」

講演者 石川 肇助教

テーマ 反転する井伊直弼——マッカーサーと
大河ドラマのつながり

講演者 安井 眞奈美教授

テーマ パラオの女性首長が見た日本
司 会 倉本 一宏教授

日文研・アイハウス連携フォーラム

第一一回「平成二九年七月四日（火）」

講演者 李 済滄（南京師範大学准教授／日

文研外国人研究員

テーマ 谷川道雄の中国史研究から日中の未来を考える―文化交流と学術思想

第一二回 [平成二九年一月二八日(金)]

講演者 ジョン・ブリーン教授

テーマ オーナメンタル・ディプロマシー…

明治天皇と近代日本の外交

第一三回 [平成三〇年一月三〇日(火)]

講演者 荒木 浩教授

テーマ 光源氏と〈二人の父〉という宿命

―ブツダの伝記が照らし出す『源氏物語』

の視界―

一般公開

[平成二九年一〇月二八日(土)]

【歴史マンガをどう読むか?】

登壇者 荒木 浩教授、細川 周平教授、吉

村 和真客員教授、エルナンデス・エルナ

ンデス・アルバロ・ダビド プロジェクト

研究員

司会 大塚 英志教授

【日本史の戦乱と民衆】

登壇者 倉本 一宏教授、磯田 道史准教

授、フレデリック・クレインス准教授、呉

座 勇一助教

司会 石上 阿希特任助教

【昭和初期の演芸SPレコードと大衆文化】

講師 古川 綾子特任助教

【「大正の広重」 吉田初三郎とタイムトリッ

プ!】

講師 石川 肇助教

国際研究集会

[平成二九年一〇月一三日(金)〕一五日

(日)]

テーマ 植民地帝国日本における知と権力

研究代表者 松田 利彦教授

[平成三〇年三月二日(金)〕三日(土)]

テーマ 戦後日本文化再考

研究代表者 坪井 秀人教授

海外シンポジウム

[平成二九年一月九日(木)〕一二月二

日(日)]

テーマ Japanese Studies After 3.11

場所 ライプツィヒ大学中央図書館(ドイ

ツ)

シンポジウム

[平成二九年五月一四日(日)]

【国際日本研究】コンソーシアム準備会主催シンポジウム

テーマ なぜ国際日本研究なのか

[平成二九年七月二四日(月)〕二五日(火)]

テーマ 近世期絵入百科事典データベース公

開記念―書物にみる絵とことばの350年

[平成二九年七月二九日(土)]

テーマ 妖怪データベースからの創造―公開

15周年記念シンポジウム

[平成二九年十二月二日(土)〕三日(日)]

テーマ 一九五〇―六〇年代転換期のサーク

ル運動の位相―「職場の歴史」「サークル村」

「母の歴史」などに関連して

〔平成三〇年二月一日（木）〕～四日（日）

テーマ イストリエタ、漫画と大衆文化、現代大衆文化から見たメキシコと日本

〔平成三〇年二月二日（月）〕

国際日本文化研究センター・京都市立芸術大学
日本伝統音楽研究センター共同シンポジウム

テーマ 浪花節と講談の関係を探る

〔平成三〇年三月一七日（土）〕

「国際日本研究」コンサート主催シンポジウム

テーマ 「国際日本研究」と教育実践

レクチャー

第一五一回〔平成二九年四月二七日（木）〕

発表者 ラジ・シユタイネット（チューリヒ

大学主任教授）

テーマ 中世における時間意識とシンボル形

式の理論からのアプローチ

コメンテーター マルクス・リュッターマン

教授

主宰者 荒木 浩教授

第一五二回〔平成二九年七月五日（水）〕

発表者 殿村 ひとみ（ミシガン大学教授）

テーマ 米国「公立」大学における最近の課

題と動向―特にミシガン大学の教育指針、

現場環境、日本学の位置―

コメンテーター 山田 奨治教授

司 会 榎本 渉准教授

第一五三回〔平成二九年八月四日（金）〕

発表者 荻部 直（東京大学教授）

テーマ 「文明」と「宗教」―十九世紀の日

本を中心に

コメンテーター 山口 輝臣（東京大学准教

授）

司 会 瀧井 一博教授

第一五四回〔平成二九年一二月二三日（土）〕

発表者 山口 輝臣（東京大学准教授）

テーマ 「国家神道」…どこから来たのか？

どこへ行くのか？

コメンテーター 荻部 直（東京大学教授）

司 会 瀧井 一博教授

第一五五回〔平成三〇年一月三一日（水）〕

発表者 ジョン・W・トリート（イェール大

学名誉教授）

テーマ 近代日本文学盛衰

コメンテーター 高木 信（相模女子大学

教授）、樋口 大祐（神戸大学教授）

司 会 坪井 秀人教授

三〇周年記念事業

〔平成二九年五月一七日（水）〕

創立三〇周年記念講演会

講演者 梅原 猛顧問

聞き手 磯田 道史准教授

テーマ 日文研と私―回顧と展望

講演者 ジェームズ・E・ケテラー（シカゴ

大学教授）

テーマ 日本研究の諸問題―歴史と歴史学

をめぐる省察

司 会 牛村 圭教授

〔平成二九年五月二六日（金）〕

国際日本文化研究センター創立三〇周年記念

イベント

テーマ 映画「ハッピーアワー」 上映&監

督・主演女優トーク

ゲスト 濱口 竜介(映画監督)、田中 幸

恵(主演)、菊池 葉月(主演)

司会 北浦 寛之助教

会議

運営会議

第四五回 平成二九年 六月三〇日(金)

第四六回 平成二九年 九月二九日(金)

第四七回 平成二九年 一二月 八日(金)

第四八回 平成三〇年 三月 九日(金)

調整会議

第二七五回 平成二九年 四月 五日(水)

第二七六回 平成二九年 四月一九日(水)

第二七七回 平成二九年 五月一〇日(水)

第二七八回 平成二九年 五月二四日(水)

第二七九回 平成二九年 六月 七日(水)

第二八〇回 平成二九年 六月二〇日(火)

第二八一回 平成二九年 七月 五日(水)

第二八二回 平成二九年 七月一九日(水)

第二八三回 平成二九年 九月 六日(水)

第二八四回 平成二九年 九月二〇日(水)

第二八五回 平成二九年 一〇月 四日(水)

第二八六回 平成二九年 一〇月一八日(水)

第二八七回 平成二九年 一一月 一日(水)

第二八八回 平成二九年 一一月二一日(火)

第二八九回 平成二九年 一二月 六日(水)

第二九〇回 平成二九年 一二月二〇日(水)

第二九一回 平成三〇年 一月 九日(火)

第二九二回 平成三〇年 一月二四日(水)

第二九三回 平成三〇年 二月 七日(水)

第二九四回 平成三〇年 二月二一日(水)

第二九五回 平成三〇年 三月 六日(火)

第二九六回 平成三〇年 三月二〇日(火)

センター会議

第二七五回 平成二九年 四月 六日(木)

第二七六回 平成二九年 四月二〇日(木)

第二七七回 平成二九年 五月 一日(木)

第二七八回 平成二九年 五月二五日(木)

第二七九回 平成二九年 六月 八日(木)

第二八〇回 平成二九年 六月二二日(木)

第二八一回 平成二九年 七月 六日(木)

第二八二回 平成二九年 七月二〇日(木)

第二八三回 平成二九年 九月 七日(木)

第二八四回 平成二九年 九月二一日(木)

第二八五回 平成二九年 一〇月 五日(木)

第二八六回 平成二九年 一〇月一九日(木)

第二八七回 平成二九年 一一月 二日(木)

第二八八回 平成二九年 一一月二二日(水)

第二八九回 平成二九年 一二月 七日(木)

第二九〇回 平成二九年 一二月二一日(木)

第二九一回 平成三〇年 一月 一日(木)

第二九二回 平成三〇年 一月二五日(木)

第二九三回 平成三〇年 二月 八日(木)

第二九四回 平成三〇年 二月二二日(木)

第二九五回 平成三〇年 三月 七日(水)

第二九六回 平成三〇年 三月二二日(木)

外国人来訪者

平成二九年六月二九日 Jason P. Hyland (駐

日米国大使館臨時大使) 他四名

平成二九年九月二七日 Michael Lim Tan

(フィリピン大学ディリマン校学長)、国際
交流基金(日本研究・知的交流部) 計四名
平成二九年一〇月三十一日 坂井セシル(日仏
会館フランス事務所・日本研究センター所
長)

平成二九年一月二日 Erich Pauet (アルザ
ス・欧州日本学研究所(CEEJA) 副所長、
フィリップ大学マールブルク教授) 他一名

平成二九年一月二二日 Carel Stalker (ラ
イデン大学学長) 計一行、計一〇名

平成二九年一月二八日 国際交流基金関西
国際センター・平成二九年度専門日本語研
修(文化・学術専門家) 計一行、計二二名

平成三〇年三月六日 国際交流基金・平成二九
年度ロシア若手研究者育成プログラム参加
者) 一行、計一名

平成三〇年三月二二日 Alicia Grón González
(アジア&アフリカ研究プログラム メキ
シコ自治大学(UNAM) 教授) 他一名

海外渡航

松田 利彦 教授

目的 台湾国家図書館にて資料調査及び研
究論文収集、国立台湾図書館にて雑誌の調
査、新竹市文化局影像博物館及び新竹消防
博物館にて資料調査、中央研究院台湾史研
究所にて資料調査及び論文収集

目的国 台湾

期間 平成二九年四月一三日〜一八日

坪井 秀人 教授

目的 リーハイ大学にてワークショップに
参加し報告、ニューヨーク近代美術館にて
特別展示を見学

目的国 アメリカ

期間 平成二九年四月二〇日〜二六日

稲賀 繁美 副所長

目的 ロンドン芸術大学 TeAtin にてプロ
ジェクトミーティング・レクチャーに参
加、ヴィクトリア&アルバート博物館にて
資料調査及び見学、オックスフォード大学

にて会議

目的国 イギリス

期間 平成二九年五月二日〜九日

倉本 一宏 教授

目的 ソウル女子大学校にて講演

目的国 韓国

期間 平成二九年五月一五日〜一七日

坪井 秀人 教授

目的 交通大学国際文化研究センターにて
ワークショップに参加、基調講演及び研究
打ち合わせ

目的国 台湾

期間 平成二九年五月一日〜一四日

石上 阿希 特任助教

目的 大英博物館にて展覧会のオープニン
グ及び関連シンポジウムに参加及び資料調
査

目的国 イギリス

期間 平成二九年五月二二日〜二九日

山田 奨治 教授

目的 フランクフルト大学にて講演

- 目的国 ドイツ
 期間 平成二九年五月二四日～二八日
 磯前 順一 教授
 目的 國立交通大學にて講演会に参加及び
 研究報告、国立政治大学台湾文学研究所に
 て教員と面談及び調査、台湾神社跡にて調
 査
- 目的国 台湾
 期間 平成二九年五月三一日～六月六日
 松田 利彦 教授
 目的 国立中央図書館、国会図書館及びソ
 ウル大学中央図書館にて資料・論文の調
 査及び雑誌記事の調査、ソウル大学教員と
 面談
- 目的国 韓国
 期間 平成二九年六月一日～六日
 坪井 秀人 教授
 目的 カリフォルニア大学ロサンゼルス校
 (UCLA) にてワークショップに出席及び
 報告
- 目的国 アメリカ
 期間 平成二九年六月二二日～二九日
- 期間 平成二九年六月九日～一三日
 榎本 渉 准教授
 目的 高麗大学校グローバル日本研究院に
 て講演
- 目的国 韓国
 期間 平成二九年六月一四日～一六日
 マルクス・リュッターマン 教授
 目的 ベルリン州立図書館にて共同研究の
 打ち合わせ、編集打ち合わせ及び資料収
 集・閲覧、フランクフルト大学にて共同研
 究の打ち合わせ、チュービンゲン大学にて
 共同研究の打ち合わせ及び出版・編集打ち
 合わせ
- 目的国 ドイツ
 期間 平成二九年六月一六日～二九日
 劉 建輝 副所長
 目的 東国大学校にてシンポジウムに出
 席、北京日本学研究中心にて交流協定締結
 業務及び敦煌視察
- 目的国 韓国、中国
 期間 平成二九年六月二二日～二九日
- ジョン・ブリーン 教授
 目的 高麗大学校にて AAS-in-ASIA への
 参加及びパネル発表
- 目的国 韓国
 期間 平成二九年六月二三日～二六日
 小松 和彦 所長
 目的 北京日本学研究中心にて講演会に参
 加し発表、交流協定締結及び敦煌視察
- 目的国 中国
 期間 平成二九年六月二五日～二九日
 坪井 秀人 教授
 目的 ウーロンゴン大学にて学会大会に参
 加しパネル報告
- 目的国 オーストラリア
 期間 平成二九年六月二五日～七月一日
 吳座 勇一 助教
 目的 バイケンツト大学にて国際学術大会に
 参加
- 目的国 トルコ
 期間 平成二九年七月三日～十日

坪井 秀人 教授

目的 チュラロンコン大学にて講義、個人指導及び講演

目的国 タイ

期間 平成二九年七月一日～八月一六日

佐野 真由子 准教授

目的 アメリカ議会図書館にて調査

目的国 アメリカ

期間 平成二九年七月十三日～二十三日

大塚 英志 教授

目的 長春理工大学にて集中講義及び打ち合わせ、北京外国語大学にてミーティング

目的国 中国

期間 平成二九年八月六日～十二日

佐野 真由子 准教授

目的 アスタナ市で開催中のアスタナ万博にて現地調査

目的国 カザフスタン

期間 平成二九年八月八日～十三日

楠 綾子 准教授

目的 中国国際問題研究院にて意見交換、

台北市内にて日本研究者と面会

目的国 中国、台湾

期間 平成二九年八月十五日～一九日

坪井 秀人 教授

目的 淡江大学にてセミナー合宿を主催参加し指導、淡江大学等にてスタディツアー

目的国 台湾

期間 平成二九年八月二日～二五日

北浦 寛之 助教

目的 イースト・アングリア大学にて調査及び資料収集

目的国 イギリス

期間 平成二九年八月二日～九月二三日

佐野 真由子 准教授

目的 リスボン新大学につEJIS (European Association for Japanese Studies) 年次総会に参加及びワークショップ開催

目的国 ポルトガル

期間 平成二九年八月二六日～九月四日

荒木 浩 教授

目的 リスボン新大学につEJIS 及び関連

イベントに参加し発表

目的国 ポルトガル

期間 平成二九年八月二七日～九月四日

ジョン・ブリーン 教授

目的 リスボン新大学につEJIS 年次総会に参加及びワークショップ開催、Tour

Fátima - Batalha - Alcobaca - Nazaré - Óbidos

にて調査

目的国 ポルトガル

期間 平成二九年八月二七日～九月三日

吳座 勇一 助教

目的 リスボン新大学につEJIS 年次総会に参加

目的国 ポルトガル

期間 平成二九年八月二八日～九月三日

劉 建輝 副所長

目的 リスボン新大学につEJIS 年次総会に参加及びワークショップ開催

目的国 ポルトガル

期間 平成二九年八月二八日～九月四日

井上 章一 教授

目的 リスボン新大学にてEAS 年次総会
に参加及びワークショップ開催

目的国 ポルトガル

期間 平成二九年八月二八日～九月四日

楠 綾子 准教授

目的 リスボン新大学にてEAS 年次総会
に参加及び報告

目的国 ポルトガル

期間 平成二九年八月二八日～九月四日

稲賀 繁美 副所長

目的 リスボン自由大学にて欧州日本学会
議に参加、スリジー国際文化センターにて
研究会に参加及び発表、ヴィーン大学国際
会議にて招聘講演、ヴェネチア大学にて
ワークショップ及びシンポジウムに参加

目的国 ポルトガル、フランス、オーストリ
ア、イタリア

期間 平成二九年八月二八日～九月一八日

坪井 秀人 教授

目的 リスボン新大学にてEAS 年次総会
に参加及びワークショップ開催

目的国 ポルトガル

期間 平成二九年八月二九日～九月五日

安井 眞奈美 教授

目的 ハンガリー・ベニス・パトヴァ・
フィレンツェ・プラト・ボローニャ・ミラ
ノにて調査・資料収集・情報収集、ヴェネ
ツィア・カ・フォスカリ大学にてワーク
ショップに出席し登壇及び学会に参加

目的国 ハンガリー、イタリア

期間 平成二九年九月七日～一八日

荒木 浩 教授

目的 北京師範大学にてワークショップに
参加し発表

目的国 中国

期間 平成二九年九月八日～一一日

磯前 順一 教授

目的 オックスフォード大学及び日産研究
所にてヒアリング及び日文研との交流打
診、ダーラム大学にてワークショップに出
席

目的国 オックスフォード

期間 平成二九年九月二日～一七日

坪井 秀人 教授

目的 オーストラリア国立大学にてシンポ
ジウムに参加及び基調講演、キャンベラ大
学にてワークショップに参加

目的国 オーストラリア

期間 平成二九年九月一二日～一八日

小松 和彦 所長

目的 ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学
にてワークショップ及び学会に参加し講演
及び学術交流

目的国 イタリア

期間 平成二九年九月一二日～一九日

前川 志織 特任助教

目的 オスロ大学にてEASRS（日本資料
専門家欧州協会）総会に出席、ワーク
ショップ出展及び資料調査、デザイン
ミュージアム（ヘルシンキ）にて調査

目的国 ノルウェー、フィンランド

期間 平成二九年九月一二日～一九日

劉建輝 副所長

目的 東北師範大学にて国際シンポジウムに参加し討論、哈爾濱市にて調査

目的国 中国

期間 平成二九年九月一七日～二四日

石川 肇 助教

目的 東北師範大学にて国際シンポジウムに参加し司会、哈爾濱市にて調査

目的国 中国

期間 平成二九年九月一七日～二四日

井上 章一 教授

目的 東北師範大学にて国際シンポジウムに参加、黒龍江大学にて交流座談会及び現地調査に参加

目的国 中国

期間 平成二九年九月一七日～二四日

坪井 秀人 教授

目的 西江大学校にて国際セミナーに参加

目的国 韓国

期間 平成二九年九月二〇日～二三日

伊東 貴之 教授

目的 復旦大学図書館・哲学学院にて国際学術研究会に出席し報告、打ち合わせ及び資料収集

目的国 中国

期間 平成二九年九月二〇日～二五日

大塚 英志 教授

目的 EIMA:Ecole Internationale du Manga et de l'Animation によりワークショップ開催及びEIMA視察

目的国 フランス

期間 平成二九年十月二日～七日

小松 和彦 所長

目的 天津賽象酒店にて国際学術大会に参加及び運営委員会会議に出席

目的国 中国

期間 平成二九年十月二七日～三〇日

劉建輝 副所長

目的 天津賽象酒店にて国際学術大会に参加及び運営委員会会議に出席

目的国 中国

期間 平成二九年十月二七日～三〇日

松田 利彦 教授

目的 天津賽象酒店にて国際学術大会に参加及び運営委員会会議に出席

目的国 中国

期間 平成二九年十月二七日～三〇日

佐野 真由子 准教授

目的 天津賽象酒店にて国際学術大会に参加及び運営委員会会議に出席

目的国 中国

期間 平成二九年十月二七日～三〇日

吉江 弘和 助教

目的 天津賽象酒店にて国際学術大会に参加及び運営委員会会議に出席

目的国 中国

期間 平成二九年十月二七日～三〇日

マルクス・リュッターマン 教授

目的 ライプツィヒ大学にて海外シンポジウムに参加、ハンプルク大学にてワークショップに参加、ボーフム大学にてワークショップ及び特講参加、コンソーシアム事

目的国 中国

務長及び所長と面談、図書館見学、ルール大学教員と面談、ハンブルク大学にて資料調査

目的国 ドイツ

期間 平成二九年一月三日～一七日

安井 眞奈美 教授

目的 全南大学校にて国際シンポジウムに参加、順天市病院にて見学及びディスカッション

目的国 韓国

期間 平成二九年一月六日～九日

松田 利彦 教授

目的 ライプツィヒ大学にて海外シンポジウムに参加、プロイセン文化財枢密公文書館、ロバートコッホ研究所博物館及びベルリンフンボルト大学医学史博物館にて調査、ボーフム大学にてコンソーシアム事務長及び所長と面談、特講で発表、ルール大学教員と面談、ゲオルグシュバイアーハウス、フランクフルト市史研究所、ハイデルベルグ大学文書庫及びパウエルリッヒ

研究所にて資料調査

目的国 ドイツ

期間 平成二九年一月六日～二二日

坪井 秀人 教授

目的 ライプツィヒ大学にて海外シンポジウムに参加、ボーフム大学にて調査及び意見交換、パリ第7大学にて会議に参加し登壇

目的国 ドイツ

期間 平成二九年一月七日～二〇日

磯前 順一 教授

目的 ライプツィヒ大学にて海外シンポジウムに参加、ボーフム大学にてワークシヨップ及び特講参加、コンソーシアム事務長及び所長と面談、ルール大学教員と面談

目的国 ドイツ

期間 平成二九年一月八日～一七日

荒木 浩 教授

目的 ハノイ国家大学外国語大学にて国際シンポジウムに参加し発表及び研究交流
目的国 ベトナム

期間 平成二九年一月九日～一二日

山田 奨治 教授

目的 ライプツィヒ大学にて海外シンポジウムに参加

目的国 ドイツ

期間 平成二九年一月九日～一三日

パトリシア・フィスター 教授

目的 ライプツィヒ大学にて海外シンポジウムに参加

目的国 ドイツ

期間 平成二九年一月九日～一四日

フレデリック・クレインス 准教授

目的 ハーグ国立文書館にて文書移行作業、ライデン大学にてシンポジウムに参加及び発表

目的国 オランダ

期間 平成二九年一月二一日～二六日

安井 眞奈美 教授

目的 オークランド大学にて講演及び情報収集、オタゴ大学にてNZASIA (The New Zealand Asian Studies Society) 2017 Interna-

tional Conference)に参加、オタゴポリテク
ニックにて面談、メルボルン大学にて打ち
合わせ及び情報交換

目的国 オーストラリア、ニュージーランド
期間 平成二九年一月二三日～二月四
日

細川 周平 教授

目的 国立臺灣大学音楽学研究所にて国際
シンポジウムに参加及び研究打ち合わせ

目的国 台湾

期間 平成二九年一月二六日～三〇日

磯前 順一 教授

目的 ポートランド州立大学日本研究セン
ターにて講義及び公開講演

目的国 アメリカ

期間 平成二九年一月二八日～二月二
日

劉 建輝 副所長

目的 中央研究院にてシンポジウムに出席
し研究発表及び資料調査、ワークシヨップ
に出席し研究発表

目的国 台湾
期間 平成二九年一月三〇日～二月五
日

松田 利彦 教授

目的 国会図書館、国立中央図書館にて雑
誌及び論文の閲覧・複写、慶熙大学人文大
学大学院にて特別講義

目的国 韓国

期間 平成二九年二月一日～四日

佐野 真由子 准教授

目的 プリンストン大学にて合同セミナー
への参加及び研究発表

目的国 アメリカ

期間 平成三〇年一月二三日～二九日

大塚 英志 教授

目的 バスコンセロス図書館、メキシコ国
立人類学歴史学大学・社会人類学学院、エ
ル・コレヒオ・デ・メヒコ、アジア・アフ
リカ研究センターにて展示及びシンポジウ
ム、国際集会に出席並びに運営

目的国 メキシコ

期間 平成三〇年一月三十一日～二月六日
前川 志織 特任助教

目的 バスコンセロス図書館、メキシコ国

立人類学歴史学大学・社会人類学学院、エ
ル・コレヒオ・デ・メヒコ、アジア・アフ
リカ研究センターにて展示及びシンポジウ
ム、国際集会に出席並びに運営

目的国 メキシコ

期間 平成三〇年一月三十一日～二月六日

北浦 寛之 助教

目的 バスコンセロス図書館、メキシコ国

立人類学歴史学大学・社会人類学学院、エ
ル・コレヒオ・デ・メヒコ、アジア・アフ
リカ研究センターにて展示及びシンポジウ
ム、国際集会に出席並びに運営

目的国 メキシコ

期間 平成三〇年一月三十一日～二月六日

石川 肇 助教

目的 全南大学校にて研究発表及び情報交

換
目的国 韓国

- 期間 平成三〇年二月一日～三日
 ジョン・ブリーン 教授
 目的 Daiva Foundation Japan House にて発表及び事前打ち合わせ、The Queen's Gallery, Buckingham Palace、National Archives にて調査及び情報収集
 目的国 イギリス
 期間 平成三〇年二月四日～一二日
 稲賀 繁美 副所長
 目的 Bangladesh Shipakala Academy にて招待講演及び討論会に参加、シンガポール国立博物館にて展示会を見学
 目的国 バングラデシュ、シンガポール
 期間 平成三〇年二月七日～一三日
 安井 真奈美 教授
 目的 ベラウ国立博物館にて資料収集及び調査
 目的国 パラオ共和国
 期間 平成三〇年二月二七日～三月五日
 ジョン・ブリーン 教授
 目的 サンフランシスコ大学にてシンポジウムに参加、情報収集及び発表、Asian Art Museum にて調査
 目的国 アメリカ
 期間 平成三〇年三月四日～九日
 伊東 貴之 教授
 目的 浙江大学にてワークショップ及びセミナーに参加、学術交流
 目的国 中国
 期間 平成三〇年三月五日～一〇日
 磯前 順一 教授
 目的 ニューヨーク市立大学、コロンビア大学ドナルド・キーン研究所、プリンストン高等研究所、プリンストン大学東アジア研究所にて面談
 目的国 アメリカ
 期間 平成三〇年三月九日～一六日
 榎本 渉 准教授
 目的 国立済州博物館、済州民俗自然史博物館、済州市、済州島及び国立海洋文化財研究所にて現地踏査
 目的国 韓国
 期間 平成三〇年三月一三日～一六日
 坪井 秀人 教授
 目的 旧関東軍司令官官邸（長春市）及び吉林省政治協商委員会庁舎（長春市）にて見学及び講演会・意見交換会に参加、第七三一部隊罪証陳列館（哈爾浜市）にて見学及び調査
 目的国 中国
 期間 平成三〇年三月一三日～一七日
 荒木 浩 教授
 目的 ソフィア大学にて国際会議に参加、基調講演及び研究交流
 目的国 ブルガリア
 期間 平成三〇年三月一六日～二二日
 呉座 勇一 助教
 目的 Marriott Wardman Park にてアジア研究協会 (Association of Asian Studies: AAS) の年次総会に参加、アメリカ合衆国国立公文書館にて学会準備
 目的国 アメリカ
 期間 平成三〇年三月二〇日～二七日

瀧井 一博 教授

目的 Marriott Wardman Park にて AAS 年次

総会に参加し報告及び情報収集、アメリカ

合衆国国立公文書館にて資料調査

目的国 アメリカ

期間 平成三〇年三月二一日～二六日

坪井 秀人 教授

目的 Marriott Wardman Park にて AAS 年次

総会に参加

目的国 アメリカ

期間 平成三〇年三月二一日～二七日

ジョン・ブリーン 教授

目的 Marriott Wardman Park にて AAS 年次

総会に参加

目的国 アメリカ

期間 平成三〇年三月二一日～二七日

パトリシア・フィスター 教授

目的 Marriott Wardman Park にて AAS 年次

総会に参加

目的国 アメリカ

期間 平成三〇年三月二二日～二七日

荒木 浩 教授

目的 全南大学校にて講演

目的国 韓国

期間 平成三〇年三月二七日～二九日

所員活動一覧（二〇一七年四月一日～二〇一八年三月三十一日）

荒木 浩

● 著書

『ひと・もの・知の往来—シルクロードの文化学』（近本謙介・李銘敬と共編）勉誠出版 二〇一七年五月 二二六頁

● 論文

『古典文学の現代的・国際的投企性（projection）—視覚とメディアをめぐる事例紹介と展望—』『日語日文学研究 日本文学・日本学篇』第

一〇〇輯二卷 二〇一七年四月 二一～三六頁（査読付き）

『『今昔物語集』の成立と宋代—成尋移入書籍と『大宋僧史略』などをめぐって—』吉川真司・倉本一宏編『日本の時空観の形成』思文閣出版 二〇一七年五月 三三五～三八六頁

『投企される〈和国性〉—『日本往生極楽記』改稿と和歌陀羅尼をめぐる』荒木浩・近本謙介・李銘敬共編『ひと・もの・知の往来—シルクロードの文化学』アジア遊学208 二〇一七年五月 一八六～二〇四頁

『散文の生まれる場所—〈中世〉という時代と自照性—』『中世文学』六二号 二〇一七年六月 二四～三三（査読付き）

『出家譚と妻と子—仏伝の日本化と中世説話の形象をめぐる』『東アジアの仏伝文学』二〇一七年六月 四五五～四九三頁

『国文学史』の振幅と二つの戦後—西洋・『世界文学』・風景景次郎をめぐる』井上章一編『学問をしるもの』思文閣出版 二〇一七年一月 一四五～一六四頁

『出産の遅延と二人の父—『原中最秘抄』から観る『源氏物語』の仏伝依拠—』『国語と国文学』平成三十年二月号（第九十五卷第二号）通巻千百三十一号 二〇一八年一月 一～一九頁（招待）

『妊娠小説』としてのブッダ伝—日本古典文学のひながたをさぐる』郭南燕・将基面貴已編『南太平洋から見る日本研究…歴史、政治、文学、芸術』国際日本文化研究センター 二〇一八年三月 五三～六五頁（査読付き）

● その他の執筆活動

「捨身する古典性」 NICHIBUNKEN NEWSLETTER No. 95 二〇一七年五月

「歌を詠む心」中世文学から考える」『鶴岡』No. 125 二〇一七年六月

「インタビュー 知の探求者たち」『毎日新聞』（大阪・夕刊）二〇一七年六月十五日

「文遊回廊」（連載六回）『京都新聞』二〇一七年一〇月二六日号～二〇一八年三月二二日号

「日常としての「国際化」と「学際化」」『リポート笠間』六三三号 二〇一七年十一月

「おのれを知る」京都新聞「日本人の忘れもの」二〇一八年一月一日号

「インタビュー 今月のお宝 夢の描き方」『京都新聞』（データベースの森）二〇一八年一月一七号

「日中行事関係実書断简（『釈摩訶衍論科文』紙背）（翻刻）」後藤昭雄監修、中原香苗・米田真理子共編『天野山金剛寺善本叢刊 第二期 第三卷 儀礼・音楽』勉誠出版 二〇一八年二月 四〇六～四〇九頁

「日中行事関係実書断简（『釈摩訶衍論科文』紙背）（解題）」後藤昭雄監修、中原香苗・米田真理子共編『天野山金剛寺善本叢刊 第二期 第三卷 儀礼・音楽』勉誠出版 二〇一八年二月 五五七～五六四頁

「書評 トーマス・ハーバー、ハルオ・シラネ編『源氏物語』を読む——十世紀からの文献群」『日本研究』第五七集 二〇一八年三月

●論文

石上 阿希

●論文

「『訓蒙図彙』考序論…絵入百科事典データベース構築とともに」郭南燕・将基面貴已編『南太平洋から見る日本研究…歴史、政治、文学、芸術』

国際日本文化研究センター 二〇一八年三月 六九～七八頁（査読付き）

●その他の執筆活動

「インタビュー 発信・再発見ニッポン江戸の風俗カラリ 日本初の「春画博士」」『日本経済新聞』二〇一七年四月三〇日

「尋常ならざる春画はなぜ生まれたのか？」『とんでも春画—妖怪・幽霊・けものたち—』二〇一七年五月

「英国 禁断の絵師・河鍋曉斎」『京都新聞』二〇一七年五月三〇日

「近世期における春画の用途と享受者」松田浩・上原作和・佐谷眞木人・佐伯孝弘編『古典の常識を疑う』勉誠出版 二〇一七年六月 二二四頁

「探検！データベースの森 平安京都名所図会DB」『京都新聞』二〇一七年六月二一日

「インタビュー 世の中の挑戦者たち」『Kamome』二〇一七年七月

「日本初絵入り百科DB化」『京都新聞』二〇一七年七月二〇日

「解題『色ひいなる形』、『情ひなる形』、『風流足分船』、『風流御前二代曾我』」『浮世草子大事典』二〇一七年一〇月

「ごぞんじですか？」「近世期絵入り百科事典データベース」について（共著）『専門図書館』No.286 二〇一七年一月 三六～三九頁

「春画展をめぐる報道―近現代の春画受容史」『第14期「メディアと法」研究会記録』二〇一八年一月

「解題『恋相撰続十二手』、『上方恋修行』、『仮名手本夜光玉』、『百夜町仮宅通』、『春色初音之六女』、『別冊太陽 国貞の春画』 二〇一八年二月

「〈センター通信〉イギリス人宣教師の手紙」『日文研』六〇号 二〇一八年三月 四五～四七頁

石川 肇

● 著書

『舟橋聖一の大東亜文学共栄圏―「抵抗の文学」を問い直す―』晃洋書房 二〇一八年三月 一九二頁

● 論文

「阿部知二の手紙―新資料「舟橋聖一宛て書簡・葉書」の全て―」『阿部知二研究』Vol.24 二〇一七年四月 四～二二頁

● その他の執筆活動

「京の姿なき競馬場」(「馬の文化手帖Season2」第12回)『週刊Gallop』産業経済新聞社 二〇一七年四月

「インタビュー 戦争と舟橋聖一 問い直す」『読売新聞』(夕刊) 二〇一八年三月一五日

磯田 道史

● 著書

『司馬遼太郎』で学ぶ日本史』NHK出版 二〇一七年五月 一八七頁

『日本史の内幕』中央公論新社 二〇一七年一〇月 二五〇頁

『明治維新で変わらなかった日本の核心』（猪瀬直樹と共著）PHP 二〇一七年一月 三〇二頁

『素顔の西郷隆盛』新潮社 二〇一八年三月 二六八頁

● その他の執筆活動

「インタビュー 忍者研究、実像に迫る」『日本経済新聞』（夕刊）二〇一七年四月七日

「書評 川上仁一著『忍者の掟』／高尾善希著『忍者の末裔』」『毎日新聞』二〇一七年四月九日

「浦上玉堂と私」『玉堂清韻社報』二〇一七年四月

「古今をちこち」（連載一二回）『読売新聞』二〇一七年四月二日～二〇一八年三月一四日

「インタビュー 日本を探求 日文研30年の歩み（下）」『産経新聞』二〇一七年五月二二日

「インタビュー 創立30周年記念講演会」『京都新聞』二〇一七年五月二四日

「書評 倉本一宏著『戦争の日本古代史』」『毎日新聞』二〇一七年六月一八日

「インタビュー 京都大好きトーク第41回 門川大作とゲストの“ぎょうかん対談”」『京都新聞』二〇一七年七月八日

「データベースの森「江戸の鯨絵」」『京都新聞』二〇一七年七月一九日

「インタビュー 先輩に聞く 失敗から学ぶ」『日本経済新聞』二〇一七年八月二二日

「対談 談 古文書から届いた肉声」（連載五回）『産経新聞』（夕刊）二〇一七年八月二三日～九月一日

「想像力かき立てる「磁場」」（特別面「司馬の幕末 京李行 動乱の世燃える志」）『読売新聞』二〇一七年一〇月三一日

「インタビュー 都の人情」『京都新聞』（一日版）二〇一七年十一月一日

「しんぶん日和 第一回」『スタイルアサヒ』二〇一七年十一月

- 「対談 京滋の文化芸（松坂浩史、定家亜由子と）」『京都新聞』二〇一八年一月一日
- 「対談 新春対談二〇一八（上） 歴史と対話「今」を知る（橋本五郎（読売新聞特別編集委員）と）」『読売新聞』二〇一八年一月一日
- 「インタビュー 日本とパリの「愛のかたち」」『オール讀物』第七三巻第一号 二〇一八年一月
- 「対談 新春対談二〇一八（下） 名宰相の覚悟に学べ（橋本五郎（読売新聞特別編集委員）と）」『読売新聞』二〇一八年一月三日
- 「インタビュー 1／7 京都・明治一五〇年シンポジウム」『京都新聞』二〇一八年二月二八日

磯前 順一

● 著書

『「死者／生者」論 ―傾聴・鎮魂・翻訳―』（鈴木岩弓・佐藤弘夫と共編）ベリかん社 二〇一八年三月 三二七頁

『なぜ国際日本研究なのか』（松田利彦・磯前順一・榎本渉・前川志織・吉江弘和共編）晃洋書房 二〇一八年三月 一五一頁

● 論文

“Religion, Religious Studies, and Shinto in Modern Japan,” Richard King ed., *Religion, Theory, Critique: Classic and Contemporary Approaches and Methodologies*, Columbia University Press, July 2017, pp. 87-96

「津田左右吉の文献学と儒学的合理主義——人文学的批評はいかにして可能になるか」『WASEDA RILAS JOURNAL』No. 5 二〇一七年一〇月 三三二―三四〇頁

“Revering Heaven and Prostrating before the Earth: History of the Shinto Fushimi Inari Great Toyo Church,” Michael Wachutka and Monika Schrimpf and Birgit Staemmer eds., *Religion, Politik und Ideologie: Beiträge zu einer kritischen Kulturwissenschaft*, Iudicium, January 2018, pp. 87-102

伊東 貴之

● 著書

『呂留良与崇德人文（論文集）』（徐玲芬（主編）、共著）浙江古籍出版社 二〇一七年一〇月 三八〇頁

『「心身／身心」と「環境」の哲学——東アジアの伝統的概念の再検討とその普遍化の試み——』(『国際シンポジウム49』)(第49回国際研究集会) (編著) 国際日本文化研究センター 二〇一八年三月 二七八頁

●論文

『我們是如何認識傳統中國的…學術論争与儒教之影』(中国語)『社会科学戦線(SOCIAL SCIENCE FRONT)』月刊・総第二六二期・二〇一七年第四期 二〇一七年四月 二四四～二五二頁

『心的軌跡與身體性——由朱子學、陽明學、清代思想的考察——』(中国語)『儒学与時代…復旦大学上海儒学院首届年会論文集』 二〇一七年九月 一二四～一二八頁(査読付き)

『心の軌跡と身体性——朱子學、陽明學、清代思想から考える——』『儒学与時代…復旦大学上海儒学院首届年会論文集』 二〇一七年九月 一二八～一三五頁(査読付き)

『政治化了的朱子学——呂留良事件的立場』(共著)『呂留良与崇德人文(論文集)』浙江古籍出版社 二〇一七年一〇月 一六～四〇頁(査読付き)

『東アジアの「近世」から中国の「近代」へ——比較史と文化交流史／交渉史の視点による一考察——』『中世日本の王權と禪・宋学(東アジア海域叢書15)』汲古書院 二〇一八年三月 五九～九〇頁

●その他の執筆活動

『儒教—中華帝国の支配理念』(一三二～一三三頁)、『政治の原理—道德としての政治』(一八八～一八九頁)、中国文化事典編集委員会編『中国文化事典』丸善出版 二〇一七年四月

『高啓』(六七二頁)、『論語』(六九四頁)、『王羲之』(二八五頁)、『支那』(六七六頁)、小森陽一・飯田祐子・五味潤典嗣・佐藤泉・佐藤裕子・野網摩利子編『漱石辞典』翰林書房 二〇一七年五月

『書評 絶えざる「連鎖空間」としてのアジア——「実体化」を排した「関係」主義的な「アジア」論の提唱の試み 山室信一「アジアの思想史脈——空間思想の試み」『アジアびとの風姿——環地方学の試み』『週刊読書人』第三一九九号 二〇一七年七月

『翻訳 恩田裕正・林文孝・松下道信と共訳注『朱子語類 卷四「人物之性氣質之性」篇訳注(二) 一条～二四條』『中国哲学研究』第二九号

東京大学中国哲学研究会 二〇一七年七月（査読付き）

「解説 劉曉波の訃報に接して考える——東洋的な平和主義の伝統と非暴力・不服従の抵抗（二〇一七年／中国文学・文化 年末回顧）」『図書新聞』三三三三二号 二〇一七年十二月

稲賀 繁美

● 著書

A Pirate's View of World History: A Reversed Perception of the Order of Things From a Global Perspective, ed., International Symposium, no.50, International Research Center for Japanese Studies, August 2017, 174 pages.

『日本美術史の近代とその外部』NHK出版 二〇一八年三月 一三三頁

● 論文

「日本における西」『あいだ』二二三二号 二〇一七年四月 一九～二六頁

「竹山道雄を読む：賈金の裏から真理が現れる」『竹山道雄セレクションⅢ 美の旅人』二〇一七年五月 五五三～五六四頁

“Crossing the Borders between the Living and the Dead: An Insight into Knowledge Transfer and Issues of Post-War Reconciliation” 『世界の日本研究 2017：国際的視野からの日本研究』二〇一七年五月 三四八～三五八頁（査読付き）

「国際日本研究」の現状と課題：機関としての日文研の運営との関連で」『日本研究』第五五集 二〇一七年五月 七三～八三頁（査読付き）

“Western Modern Masters Measured on the East-Asian Literati Template: Hashimoto Kansetsu and Kyoto School Sinology.” *Art/Histories in Transcultural Dynamics: Narratives, Concepts, and Practices at Work, 20th and 21st Centuries*, August 2017, pp. 31-46（査読付き）

「オックスフォード・穴窯プロジェクト：世界に行脚する懐石と英国で窯焚きした備前焼」『あいだ』二三四号 二〇一七年八月 二八～三一頁

“A Pirate's View of the History of Art Commerce: Beyond an Oceanic View of Civilizations,” Inaga Shigemi ed., *A Pirate's View of World History: A Reversed Perception of the Order of Things From a Global Perspective*, International Symposium, no.50, International Research Center for Japanese Studies, August 2017, pp. 107-125

"Kuki Shūzō and the Idea of Metempsychosis: Recontextualizing Kuki's Lecture on Time in the Intellectual Milieu Between the Two World Wars," *Japan*

Review, No. 31, November 2017, pp. 105-122 (査読付き)

「豪奢と静寂と遊蕩の果てに」第57回ヴェネツィア・ビエンナーレ瞥見』『あいだ』二二六号 二〇一七年十一月 一六〇二五頁

「見知らぬ島へ」竹久夢二の夢とあこがれ」竹久夢二学会の旗揚げに寄せて』『竹久夢二研究』竹久夢二学会 学会誌 創刊号 二〇一七年二月 二七〇三頁【再掲載】(「あいだのすみっこ不定期漫遊連載」四回)『あいだ』二二五号 二〇一六年四月刊を再録)

「グローバル化時代における『社会設計』— Social Design の未来にむけて」アンドルー・ゴードン、瀧井一博編『創発する日本へ—ポスト「失われた20年」のデッサン』弘文堂 二〇一八年二月 二六三〇二九二頁(査読付き)

「日本美術における戌」犬一干支シリーズ』『あいだ』二三八号 二〇一八年二月 二六〇三五頁

●その他の執筆活動

「大津絵今昔」世界の目からみた庶民信仰の再評価』『図書新聞』三二九九号 二〇一七年四月

「解説 歴史哲学としての『中国書史』—その「詩想」の「うつわ」と「うつし」」石川九楊著作集別巻Ⅱ『中国書史』 二〇一七年五月 八九九〇三頁

「大学の再定義—巢立ちの礎として—」『京都新聞』(夕刊) 二〇一七年四月二六日

「妖怪と戯れて—学的想像力の現在—」『京都新聞』(夕刊) 二〇一七年六月一日

「書評 「我に触れるな」の禁令に対峙する、美的現代性の桎梏—視覚性から触覚性への転回へ」『図書新聞』 二〇一七年六月

「インタビュー 「ハッキングから偽ブランドまで」『海賊』新たな世界像探る」『海賊史観からみた世界史の再構築』『京都新聞』 二〇一七年六月五日

「インタビュー 「海賊史観」という視点—良識なき現代の鍵に」『毎日新聞』(夕刊) 二〇一七年六月八日

「日本の高等教育・学術研究の財政基盤はどうなっているのか—国立大学附置研究所・センター長会議(五月二五〇二六日)を傍聴して」『図書新聞』三三〇七号 二〇一七年六月

「意志的主体による責任」という「虚構の必要悪」…「中動態」から社会正義の根幹を問い直す(上)」『図書新聞』三三〇八号 二〇一七年六

月、「中」『図書新聞』三三〇九号 二〇一七年七月、「下」『図書新聞』三三一四号 二〇一七年八月

「ふたたび、「力を抜く」稽古について」『かみはま合気道』二〇一七年度版 第一九号 二〇一七年八月

「巻頭言 天心・岡倉覚三と五浦・イギリス・ロマン主義特輯号の余白に」『比較文学研究』一〇三号 二〇一七年九月 一〜六頁

「風（いかのぼり）きのふの空のありどころ…真偽の狭間から立ち昇る贈与の生氣」『図書新聞』三三二九号 二〇一七年十二月

「虫の音も草の底なる夜長かな…内と外から見た文明体としての徳川・日本」『図書新聞』三三三〇号 二〇一七年十二月

「横綱相撲」（江口朴郎）と評された或る人文学者の仕事を、膨大な資料から復元する…島田謹二伝―日本文学の「横綱」を読む『図書新聞』三三三二号 二〇一七年十二月

「力を抜くこと…一教の稽古のための初歩的な覚え書き」『赤門合気道』平成二九年度 第五八号 二〇一七年十二月

「「私の顔を踏むがいい」の系譜―普遍宗教との接触の「足跡」に「日本語文学」の展開を見る」郭南燕編著『キシシタンが拓いた日本語文学―多言語文化交流の淵源』『図書新聞』三三三六号 二〇一八年一月

「海を越え、峡谷に臨む世界文学にむけて―Distant reading から Distance reading へ―比較文学的アプローチの可能性」『図書新聞』三三三八号

二〇一八年二月

「書評 「青磁の断片から―竹山道雄が残した書簡群の一端を垣間見る」平川祐弘編著『手紙を通して読む 竹山道雄の世界』『こころ』Vol.41 二〇一八年二月

「中世抒情詩の東西比較からみえてくるもの…十字軍遠征と源平合戦との対比より」『図書新聞』三三四一号 二〇一八年三月

井上 章一

● 著書

『日文研が若かったころ―創立30周年記念写真集』（編集）国際日本文化研究センター 二〇一七年五月 一六七頁

『美人論』朝日新聞出版（文庫） 二〇一七年六月 三三三頁

『学問をしばるもの』（編集）思文閣出版 二〇一七年一〇月 三八二頁

『京都ざらい 官能篇』朝日新聞出版（新書）二〇一七年一月 二四二頁

●その他の執筆活動

- 「現代洛中洛外もよう」（連載三五四回）『京都新聞』二〇一七年四月一日〜二〇一八年三月三十一日
「大阪まみれ」（連載四三三回）『産経新聞』（夕刊）二〇一七年四月三日〜二〇一八年三月二六日
「ニッポン七変化」（連載一二回）『共同配信』二〇一七年四月〜二〇一八年三月
「書評 この人に聞け」『週間ポスト』（連載六回）二〇一七年四月七日号〜二〇一八年二月二日号
「言語学から見たエロ」『ヘアモード』二〇一七年五月号
「考えるサブリ」『読売新聞』（夕刊）二〇一七年五月一〇日
「インタビュー 自ら疑うことに値打ち」『産経新聞』二〇一七年五月一二日
「インタビュー 日本を探索 日文研30年の歩み（下）」『産経新聞』二〇一七年五月一二日
「聖徳太子のユーラシア」『アジア遊学・二〇八』二〇一七年五月二二日
「対談 鼎談「日文研問題」をめぐって（宮地正人、仁藤敦史、倉本一宏と）」『日本研究』第五五集 二〇一七年五月
「結局、日本人とは何なのか？」（第一回〜第一〇回）『小説幻冬』二〇一七年六月〜二〇一八年三月
「クリスマス・イブのお坊さん」『月刊住職』二〇一七年六月号
「解説（中島義道『東大助手物語』）」新潮社（文庫）二〇一七年六月一日
「インタビュー たしなみの文化考 ジャズピアノ」『毎日新聞』二〇一七年六月六日
「インタビュー 京都にプロスポーツは根付かない？」『京都新聞』（夕刊）二〇一七年六月一七日
「講評」『京都発！手紙でむすぶ家族ふれあい大賞 作品集（第一四回）京都府』二〇一七年六月三〇日
「世界が抱く日本のイメージ」『経済人』二〇一七年七月号
「ゆがめられた関西像」『学士会会報（九二五）』二〇一七年七月一日
「書評 日本犬の誕生（志村真幸著）」『京都市報』二〇一七年七月三〇日

- 「阪神タイガースの時代」『大阪ロータリークラブ週報（三〇六一）』二〇一七年八月七日
- 「インタビュー」日本人が外国人から「ひねられている」と思われる理由『AERA』二〇一七年八月一四～二二日合併号
- 「明治一五〇年」近代から現在を読む11 鹿鳴館「西洋化アビールの『付録』」『毎日新聞』（夕刊）二〇一七年八月二四日
- 「インタビュー」書きものは手書きを宗とす『サライ』二〇一七年九月号
- 「インタビュー」どうせ期待されていないのだから『鴨東通信』二〇一七年九月
- 「対談」京の暮らし 内と外（杉本節子と）『藝文京』二〇一七年九月号
- 「インタビュー」なんで私が神？！選ばれる人の極意『朝日新聞』（関西スクエア）二〇一七年九月一日
- 「『沈黙』にひそむ『瘋癲老人日記』の影―遠藤周作と谷崎潤一郎をむすぶ糸」『キリシタンが拓いた日本語文学』（郭南燕編）明石書店 二〇一七年九月
- 「七日例会報」『現代風俗（二二九）』二〇一七年九月十六日
- 「書評」『古都の占領』（西川祐子著）『日本経済新聞』（夕刊）二〇一七年九月三〇日
- 「学問を国という枠からときはなつ―アメリカのフランス革命、ソビエトの明治維新、そして桑原武夫がたどった途」『学問をしばるもの』（井上章一編）思文閣出版 二〇一七年一〇月 一三四～二五三頁
- 「真理と自由、そして学会」『学問をしばるもの』（井上章一編）思文閣出版 二〇一七年一〇月
- 「角屋と桂離宮」『学問をしばるもの』（井上章一編）思文閣出版 二〇一七年一〇月
- 「対談」明治絶対王政説とは何だったのか（竹村民郎と）『学問をしばるもの』（井上章一編）思文閣出版 二〇一七年一〇月
- 「数寄屋でのおたわむれ」『ぎをん（二二二）』二〇一七年一〇月一〇日
- 「応仁の乱以前の建築遺構」『別冊太陽スペシャル 新京都遺産』二〇一七年一〇月二九日
- 「インタビュー」下町のおばちゃんが安藤さんを育てた『安藤忠雄の奇跡』二〇一七年一月
- 「文化の都の古今東西、そして未来―京都と小京都」『比較文明（33号）』二〇一七年一月
- 「対談」関西を愛する関西人による『関西「喝」性化対談』（旭堂南陵と）『しびる』三四号 二〇一七年十一月一日

- 「対談 アイドルと「美人」 対談（須田亜香里と）」『朝日新聞』（夕刊） 二〇一七年十一月八日
- 「風俗としてのキリスト教（質疑応答記録）」『現代風俗研究会研究大会例会報告記録集』 二〇一七年一月三〇日
- 「書評 『貧困と自己責任の近代日本史』 木下光生著」『日本経済新聞』 二〇一七年二月二日
- 「インタビュー 白熱京都論（永江朗と）」『朝日新聞』 二〇一七年二月四日
- 「幾何学と比例で、建築はできたのか」伊藤公文編『百書百冊』鹿島出版会 二〇一七年二月二五日
- 「桑原武夫 批判をよるこぶ人」『文芸春秋』 二〇一八年一月号
- 「猫をかぶった人形たち」『月刊まんぱく』 二〇一八年一月号
- 「書評 二〇一八年の潮流を予感させる本」『週刊ポスト』 二〇一八年一月五日号
- 「インタビュー 老年の主張」『週刊ポスト』 二〇一八年一月五日号
- 「選評『遼』 二〇一八年一月
- 「対談 アイドルと学者「美人」を語る『朝日新聞』（夕刊） 二〇一八年一月二〇日
- 「20人が選ぶ新日本遺産一〇〇」『別冊太陽 新日本遺産』 二〇一八年一月二二日
- 「インタビュー あの人に迫る」『中日新聞』（夕刊） 二〇一八年二月九日
- 「インタビュー 落語「三枚起請」は色恋の真実!？」（桂南光と） 二〇一八年二月二四日
- 「世界へはばたく建築家―その出現をささえたもの」『創発する日本へ―ポスト「失われた20年」のデッサン』（アンドルー・ゴードン、瀧井一博編）弘文堂 二〇一八年二月 三一〇〜三二八頁
- 「ファッション主義の精神とプロテストアンティズム」『南太平洋から見る日本研究…歴史、政治、文学、芸術』（郭南燕・将基面貴已編）国際日本文化研究センター 二〇一八年三月
- 「対談 復権へ民の力結集（安藤忠雄、池坊専好、松本正義と）」『読売新聞』 二〇一八年三月一六日

牛村 圭

●その他の執筆活動

(書評) *Marathon Japan: Distance Racing and Civic Culture*, by Thomas R. H. Havens, *Japan Review*, No. 31, November 2017
 「Japan Generalistの功罪」 松田利彦・磯前順一・榎本渉・前川志織・吉江弘和編『なぜ国際日本研究なのか』晃洋書房 二〇一八年三月 七二～八一頁

(コラム) A Broken Promise 『国際日本文化研究センター (Web サイト)』 二〇一八年五月

榎本 渉

●著書

『なぜ国際日本研究なのか』(松田利彦・磯前順一・榎本渉・前川志織・吉江弘和共編) 晃洋書房 二〇一八年三月 一五一頁

●論文

『「参天台五臺山記」(成尋)——未知の世界を記録する』松蘭斉・近藤好和編『史料で読み解く日本史1 中世日記の世界』ミネルヴァ書房 二〇一七年四月 三四一～三五二頁

「中国南方の新羅人——浙江省台州の地名を手がかりに——」吉川真司・倉本一宏編『日本の時空観の形成』思文閣出版 二〇一七年五月 五一～五五三頁

「入唐僧・入宋僧の時代」鈴木靖民・金子修一・田中史生・李成市編『日本古代交流史入門』勉誠出版 二〇一七年七月 二〇七～二二二頁
 「対外関係史研究における石井正敏の学問」荒野泰典・川越泰博・鈴木靖民・村井章介編『前近代の日本と東アジア 石井正敏の歴史学』勉誠出版 二〇一七年九月 九～二九頁

●その他の執筆活動

「中世の貿易と海商」歴史科学協議会編『知っておきたい歴史の新常識』 二〇一七年六月 七八～八二頁

大塚 英志

● 著書

『TOBIO Critiques』（編著）太田出版 二〇一七年九月 一二八頁

『動員のメディアミックスへ創作する大衆』の戦時下・戦後』（編著）思文閣出版 二〇一七年九月 五一七頁

『日本がバカだから戦争に負けた 角川書店と教養の運命』星海社 二〇一七年一〇月 二六五頁

『クウデタア〈完全版〉』（西川聖蘭と共著）KADOKAWA 二〇一七年一〇月 六〇八頁

『まんがでわかるまんがの歴史』（ひらりと共著）KADOKAWA 二〇一七年一二月 三〇四頁

『八雲百怪（3）』（森美夏と共著）KADOKAWA 二〇一七年一二月 一九四頁

『八雲百怪（4）』（森美夏と共著）KADOKAWA 二〇一七年一二月 一九四頁

『ロードス島戦記』とその時代』（共編著）KADOKAWA 二〇一八年三月 二六四頁

● 論文

「アトム」は文化映画とディズニーの野合を夢見たのか』『TOBIO Critiques』※3 二〇一七年九月 六六～七四頁

『戦時下のメディアミックス——『翼賛一家』と隣組』大塚英志編『動員のメディアミックスへ創作する大衆』の戦時下・戦後』二〇一七年九月

二九～五三頁

『手塚治虫の「擬人化」とその来歴』小松和彦編『進化する妖怪文化研究』せりか書房 二〇一七年一〇月 二五〇～二六八頁

● その他の執筆活動

『恋する民俗学者2nd シーズン』（第1話～第8話）（中島千晴と共著）『ComicWalker』二〇一七年四月～九月

『柳田國男で読む主権者教育』（連載2回）『a t プラス』二〇一七年四月～五月

『妖怪学批判 第3回 妖怪とアヴァンギャルド——メタモルフォーゼという問題』『怪』vol.0050 二〇一七年四月

“‘I’ll be going blood-simple!’”（韓国語）『MYSTERIA11』二〇一七年四月

『書評 村上春樹『騎士団長殺し』』『週刊ポスト』二〇一七年五月

- 「書評 飯田泰三『大正知識人の思想風景「自我」と「社会」の発見とそのゆくえ』」『週刊ポスト』二〇一七年七月
- 「対談 ウルトラモダンが創る人と世の臨界状態（西部邁他と）」『表現者73』二〇一七年七月
- 「只有结构的日本」（中国語）『中日文化文学比较研究2017（一）夏之卷』二〇一七年七月
- 「80年代“文学”的《星球大战》化」（中国語）『中日文化文学比较研究2017（一）夏之卷』二〇一七年七月
- 「三岛由纪夫与迪士尼乐园」（中国語）『中日文化文学比较研究2017（一）夏之卷』二〇一七年七月
- 「构建“公民民俗学”的可能性」（中国語）『中日文化文学比较研究2017（一）夏之卷』二〇一七年七月
- 「萩尾望都如何描绘主人公的内心世界」（中国語）『中日文化文学比较研究2017（一）夏之卷』二〇一七年七月
- 「物语的复制与消费」（中国語）『中日文化文学比较研究2017（一）夏之卷』二〇一七年七月
- 「解説『水木しげるとアインシュタイン塔』」『水木しげる漫画大全集』二〇一七年九月
- 「まんがでわかるまんがの描き方」（連載七回）（砂威・浅野龍哉と共著）『ヤングエース』二〇一七年九月
- 「「アトム」は文化映画とディズニーの野合を夢見たのか」『TOBIO Critiques』#3 二〇一七年九月
- 「战时下的媒体组合——翼賛一家・邻组・微笑共荣圈」（中国語）『中日文化文学比较研究2017（二）冬之卷』二〇一七年一〇月
- 「绘卷为何不同于电影手法——对漫画、动画传统起源说的质疑」（中国語）『中日文化文学比较研究2017（二）冬之卷』二〇一七年一〇月
- 「妖怪学批判 スピンオフ 北京の都市伝説研究——ウサギマークと終電で帰宅する幽霊たち」『怪』vol.0051 二〇一七年一〇月
- 「自著と感情を語る（感情化する社会）について」『エモーションスタディーズ』二〇一七年一〇月
- 「書評 青山透子『日航123便 墜落の新事実 目撃証言から真相に迫る』」『週刊ポスト』二〇一七年一〇月
- 「書評 杉本仁『民俗選挙のゆくえ 津軽選挙の甲州選挙』」『週刊ポスト』二〇一七年一二月
- 「「おたく」の経済化をもたらした投稿というエコシステム」『激動の平成史』二〇一八年一月
- 「書評 花森安治『MUJIBOOKS 人と物 花森安治』」『週刊ポスト』二〇一八年一月
- 「インタビュー 戦時下にサブカルの出発点」『読売新聞』二〇一八年二月六日
- 「書評 西部邁『保守の真髄 老齡狂で語る文明の紊乱』」『週刊ポスト』二〇一八年二月

「平成30年論 第1回…西部邁の死と「工学化」する保守」『ジセダイ』 二〇一八年二月

「日本サブカルチャー読本」(翻訳・共著)『日本サブカルチャー読本』 二〇一八年三月

「니쁜 서브컬처 독본」(韓国語)『새물결』 二〇一八年三月

郭 南燕

● 著書

『世界の日本研究2017 国際的視野からの日本研究』(編著) 国際日本文化研究センター 二〇一七年五月 三六〇頁

● 論文

「京都龍安寺石庭的宇宙空間及文学表述」(中国語)『設計東方学的観念和輪郭』中国美術学院出版社 二〇一七年六月 一〇一四頁

● その他の執筆活動

「翻訳 都靈聖殮布」(林潔と共訳) 香港・良友之声出版社 二〇一七年二月

北浦 寛之

● 著書

『テレビ成長期の日本映画―メディア間交渉のなかのドラマ』名古屋大学出版会 二〇一八年三月 三二二頁

● 論文

「海外展開―『るろうに剣心』の映画化とフィリピンでの人気」山田奨治編『マンガ・アニメで論文・レポートを書く…「好き」を学問にする方法』ミネルヴァ書房 二〇一七年四月 一七二〜一九一頁

「1960年代のエロ・やくざ映画ブームとその背景―プレスシートから探る映画会社の宣伝戦略」大塚英志編『動員のメディアミックスへ創作する大衆』の戦時下・戦後』思文閣出版 二〇一七年九月 三五七〜三七七頁

「失われた撮影所システム―バブル崩壊以前／以後の日本の映画製作」アンドルー・ゴードン、瀧井一博編『創発する日本―ポスト「失われ

た20年」のデッサン』弘文堂 二〇一八年二月 一三六～一六三頁

「テレビ草創期におけるドラマ制作の展開―映画との交渉を通して」郭南燕・将基面貴已編『南太平洋から見る日本研究…歴史、政治、文学、芸術』国際日本文化研究センター 二〇一八年三月 二五三～二六一頁（査読付き）

●その他の執筆活動

「書評 渡辺裕著『感性文化論』」『京都新聞』二〇一七年六月一日

「時代劇を楽しむ（現代のことば）」『京都新聞』二〇一七年八月一〇日

「海外でのアニメ人気（現代のことば）」『京都新聞』二〇一七年九月二日

「ネット時代のテレビ、テレビ時代の映画（現代のことば）」『京都新聞』二〇一七年十一月二二日

「草創期のテレビドラマ（現代のことば）」『京都新聞』二〇一八年一月三〇日

「京都、映画、アーカイブ（現代のことば）」『京都新聞』二〇一八年三月二七日

楠 綾子

●論文

“The Early Years of the Ground Self-Defense Force, 1945-1960” Eldridge, Robert D. and Paul Midford eds, *The Japanese Ground Self-Defense Force*, New York: Palgrave Macmillan, 2017, pp. 59-131

「日本の国際緊急援助・国際防災協力政策の展開」五百旗頭真監修、片山裕編著、栗栖薫子との共同執筆『防災をめぐる国際協力のあり方―グローバル・スタンダードと現場との間で』ミネルヴァ書房 二〇一七年七月 二五～四六頁

「基地、再軍備、2 国間安全保障関係の態様：1951 年日米安全保障条約の法的意味とその理解」『年報政治学』2017-II 二〇一七年一二月 二二六～二四七頁（査読付き）

「失われた20年」の外交・安全保障論争』アンドルー・ゴードン、瀧井一博編『創発する日本へーポスト「失われた20年」のデッサン』弘文堂 二〇一八年二月 一八七～二一五頁

●その他の執筆活動

「項目執筆 平和安全法制整備法、外九件」『イミダス「防衛」2017年版』二〇一七年
「書評 赤見友子『総力戦体制下の日本のソフトパワー——外交政策における情報局と同盟通信 1943—45年』」『日本研究』第五六集
二〇一七年一〇月

倉本 一宏

●著書

『現代語訳小右記4 敦成親王誕生』吉川弘文館 二〇一七年四月 三六六頁

『日記で読む日本史13 日記に魅入られた人々 王朝貴族と中世公家』（監修、松園斉著）臨川書店 二〇一七年四月 二〇八頁

『戦争の日本古代史 好太王碑、白村江から刀伊の入寇まで』講談社 二〇一七年五月 三〇四頁

『日本的時空観の形成』（吉川真司と共編著）思文閣出版 二〇一七年五月 六〇八頁

『日記で読む日本史2 平安貴族と具注暦』（監修、山下克明著）臨川書店 二〇一七年八月 二四〇頁

『日記で読む日本史7 平安宮廷の日記の利用法』（監修、堀井佳代子著）臨川書店 二〇一七年八月 二七二頁

『日記で読む日本史8 皇位継承の記録と文学』（監修、中村康夫著）臨川書店 二〇一七年八月 一九二頁

『現代語訳小右記5 紫式部との交流』吉川弘文館 二〇一七年一〇月 三二二頁

『藤原氏の研究』雄山閣 二〇一七年一月 二二九頁

『藤原氏権力中枢の一族』中央公論新社 二〇一七年二月 三二〇頁

『日記で読む日本史9 平安朝日記文学総説』（監修、古橋信孝著）臨川書店 二〇一八年三月 二四〇頁

『日記で読む日本史16 徳川日本のナショナル・ライブラリー』（監修、松田泰代著）臨川書店 二〇一八年三月 二九六頁

●論文

『御堂関白記』古写本・寛仁元年九月卅日条と十月一日条の書写順序をめぐる」吉川真司・倉本一宏編『日本的時空観の形成』思文閣出版

二〇一七年五月 三三三～三三三頁

『御堂関白記』の仮名 新川登亀男編『日本古代史の方法と意義』二〇一八年一月 一二八～一六四頁

「六人部王の生涯―「奈良朝の政変劇」を離れて」佐藤信編『律令制と古代国家』二〇一八年三月 二四〇～二六五頁

●その他の執筆活動

『解説 あとがき―「時空」論集に向けて―』『日本の時空観の形成』（吉川真司・倉本一宏編）思文閣出版 二〇一七年五月

『対談 鼎談「日文研問題」をめぐる（司会）（宮地正人、仁藤敦史、井上章一）』『日本研究』第五五集 二〇一七年五月

『解説 鼎談「日文研問題」をめぐる はじめに』『日本研究』第五五集 二〇一七年五月

『悲運の「中関白家」、道長に敗れる』『ミネルヴァ通信「究」』七月号（通算第七六号） 二〇一七年七月

『詳説日本史研究』（共著、「大王と豪族と民衆」「中央集権への歩み」「推古朝の政治」「隋との交渉」「飛鳥文化」「大化改新」「律令国家の形成」

「白鳳文化」「律令法と統治機構」「班田収授法と農民」を執筆）山川出版社 二〇一七年八月 四五～七四頁

『インタビュー』古代日本の戦争を学ぶ意味（巻頭インタビュー）『本』二〇一七年九月号 二〇一七年八月

『御堂関白記』の伝来、「一条天皇・三条天皇・後一条天皇・藤原教通・藤原頼通・花山天皇・藤原兼家・藤原行成・藤原公任・源道方・冷泉

天皇」大津透・池田尚隆編『藤原道長事典』二〇一七年九月

『インタビュー』現代の反日・嫌韓意識の根はどこにあるのか？歴史をひも解き、現代につながる『神話』の背景を探る！（岩上安身による）

『IWJ YouTube Live』二〇一七年九月

『インタビュー』日文研・倉本教授新著 帝国志向や対朝鮮観をひもとく『京都新聞』二〇一七年九月一九日

『インタビュー』日本誕生の物語 転の章『サライ』二〇一七年十一月号 二〇一七年一〇月

『インタビュー』百済復興に隠された律令国家建設の思惑『歴史街道』二〇一七年二月号 二〇一七年一月

『インタビュー』現代の反日、嫌韓意識の根を探る。（岩上安身による）そと『IWJ YouTube Live』二〇一七年十一月

『ボブ・ディランの「スキヤキ」』『文藝春秋』二〇一七年二月号 二〇一七年二月

『インタビュー』藤原道長の著名な歌ができて来年で千年『読売新聞』二〇一七年二月二日

「ええやん！かんさい 道長の「この世をば」から千年」『読売新聞』（夕刊）二〇一七年二月七日
「インタビュ 現代の反日、嫌韓意識の根を探る。（岩上安身による）その三」『IWJ YouTube Live』二〇一八年二月

フレデリック・クレインス

● 著書

『国際日本文化研究センター所蔵日本関係欧文図書目録—1900年以前刊行分—』第四巻（編集、光平有希・小川仁と共著）臨川書店 二〇一八年二月 九六〇頁

● その他の執筆活動

「エンゲルベルト・ケンベル『日本史』フランス語版所収」『日本研究』第五五集 二〇一七年五月

「インタビュ 家康 国際情勢見極め裁定 日文研調査「冷静な為政者」評価」『読売新聞』（夕刊）二〇一七年六月一九日

「インタビュ 海外で所蔵の日本関係資料 研究、さらなる連携を 福岡市で人間文化研究機構シンポ」『西日本新聞』二〇一七年七月三日
“Piracy or Privatizing : The Capture of the Santo Antonio in 1615 and the Bakufu's Response,” Shigeni Inaga ed., *A Pirate's View of World History: A Reversed Perception of the Order of Things From a Global Perspective*. International Research Center for Japanese Studies, August 2017, 129 pages.

「インタビュ オランダ人の日本誌 17世紀、想像交え「京」を描く」『京都新聞』二〇一七年八月一六日

「インタビュ 在外資料で探る江戸時代 平戸オランダ貿易誘致」『読売新聞』二〇一七年八月一九日

「インタビュ 豊臣方放火魔洛中ぞろぞろ 大坂夏の陣直前克明に オランダ商務員書簡」『京都新聞』（夕刊）二〇一七年八月二二日
「インタビュ にじむオランダ商魂 大名上洛見込み需要増狙う 大坂夏の陣前の書簡」『京都新聞』（夕刊）二〇一七年八月二二日

「インタビュ 平戸の按針 不当な処遇 オランダ商館文書を解説」『西日本新聞』二〇一七年九月九日

「インタビュ もっと知って！日文研 来月、創立30周年の催し多彩」『京都新聞』二〇一七年九月一九日

「イザーク・ティチング『日本風俗説』パリ、一八一九年」『日本研究』第五六集 二〇一七年一〇月

「インタビュ 自由な知の「箱」日文研30年 分野を横断 外国の目で磨き」『朝日新聞』二〇一七年一〇月三日

「インタビュー 海外に眠る歴史資料 活用法は シンポジウム『海の方こうの日本文化』『朝日新聞』二〇一七年一〇月三十一日
「インタビュー 民衆を主語に内戦史を読み解く 日文研で歴史学者四人講演『京都新聞』二〇一七年一月一日

Interview “Hoe dekoloniseer je een archief? Verslag VOC-Symposium” *Historical*, December 2017

「日本関係欧文史料と史料批判についての教育プログラム開発」『きょうし』二〇一八年三月 一四頁 二〇一八年三月

「ハインリッヒ・シェラー」『アメリカ・アジア間の距離』（ミュンヘン、一七〇一年刊）『日文研』六〇号 二〇一八年三月

吳座 勇一

●著書

『陰謀の日本中世史』角川新書 二〇一八年三月 三四四頁

●論文

「一族一揆再考——門評定の再検討を中心に」『信濃』一二月号 二〇一七年二月 八八七〜九〇一頁（査読付き）

●その他の執筆活動

「インタビュー 著者インタビュー」『スポーツ報知』二〇一七年四月二二日

「交流の歴史学」（連載一一回）『朝日新聞』二〇一七年四月二二日〜二〇一八年三月三十一日

「インタビュー 『応仁の乱』ベストセラー著者に聞く、知られざる室町時代の魅力」『歴史REAL』二〇一七年四月

「対談 応仁の乱から現代を照射する（垣根涼介と）」『別冊宝島2570』二〇一七年四月

「インタビュー 『応仁の乱』著者インタビュー」『東京新聞』二〇一七年五月六日

「インタビュー 『応仁の乱』著者インタビュー」『産経新聞』二〇一七年五月三十一日

「インタビュー 『応仁の乱』著者インタビュー（元木昌彦と）」『エルネオス』二〇一七年五月号 二〇一七年六月

「応仁の乱と第1次世界大戦」『文藝春秋』六月号 二〇一七年六月

「インタビュー 硬派歴史書が大ヒット 37万部越え『応仁の乱』」『産経新聞』二〇一七年六月五日

- 「インタビュ」『応仁の乱』著者インタビュ」『日経おとなのOFF』二〇一七年七月号 二〇一七年六月六日
- 「インタビュ」『応仁の乱』著者インタビュ」『歴史街道』二〇一七年八月号 二〇一七年六月六日
- 「インタビュ」『応仁の乱』著者インタビュ」『日刊スポーツ』二〇一七年六月一日
- 「インタビュ」戦国前夜の日本史』『三オックス』二〇一七年六月
- 「書評」近年の国内ディストピアSF』『群像』講談社 二〇一七年七月
- 「解説」異端者たちの武士道』『和田竜読本』二〇一七年七月
- 「インタビュ」『応仁の乱』著者インタビュ」『日経トレンドディ』二〇一七年七月号 二〇一七年七月
- 「インタビュ」『応仁の乱』著者インタビュ」『商工ジャーナル』二〇一七年九月
- 「解説」歩けばわかる「応仁の乱」『サライ』二〇一七年九月
- 「書評」石原千秋著『漱石と三人の読者』『京都新聞』二〇一七年九月一〇日
- 「書評」空想書店』『読売新聞』二〇一七年一〇月八日
- 「書評」亀田俊和著『観応の擾乱』『朝日新聞』二〇一七年一〇月二〇日
- 「対談（出口治明と）』『週刊文春』二〇一七年十一月一日号 二〇一七年十一月
- 「インタビュ」編集委員インタビュ」混沌の時代現代人も共感 応仁の乱、ブームの理由は？」『神戸新聞』二〇一七年十二月三日
- 「インタビュ」等身大欲す「平成の乱」『毎日新聞』二〇一七年十二月五日
- 「インタビュ」ええやん！かんさい 語る聞く「応仁の乱 現代と酷似」『読売新聞』（夕刊）二〇一八年一月二〇日
- 「インタビュ」Vivid Voice 歴史学者インタビュ」『駿台予備校「SUNDAI ADVANCE」』二〇一八年三月
- 「読まない」と後悔する本 呉座勇一が選ぶ日本の戦の本6冊』『SPIO』二〇一八年三月
- 「インタビュ」新著『陰謀の日本中世史』について語る』『京都新聞』二〇一八年三月二二日
- 「インタビュ」『陰謀の日本中世史』を書いた 呉座勇一さん』『北海道新聞』二〇一八年三月二五日

小松 和彦

● 著書

『47都道府県・妖怪伝承百科』（常光徹と監修、香川雅信・飯倉義之編著）丸善出版 二〇一七年九月 三二〇頁

『進化する妖怪文化研究』（編著）せりか書房 二〇一七年一〇月 五〇二頁

● 論文

「洪水怪異伝承の構造と意味」小松和彦編『進化する妖怪文化研究』せりか書房 二〇一七年一〇月 一〇～三五頁

「ミクロネシアの離島で日本文化を考える 妖怪譚を中心に」郭南燕・将基面貴已編『南太平洋から見る日本研究…歴史、政治、文学、芸術』

国際日本文化研究センター 二〇一八年三月 一一～二六頁

● その他の執筆活動

「対談 「みんなくと日文研」（上）（吉田憲司と）『毎日新聞』（夕刊） 二〇一七年四月二〇日

「対談 「みんなくと日文研」（下）（吉田憲司と）『毎日新聞』（夕刊） 二〇一七年四月二七日

「講演資料等 埼玉大学フェロー称号授与記念講演会 謎解きという快楽に魅せられて—私の学問人生—」『SAIDAI CONCERGE』vol.25

二〇一七年五月

「講演資料等 創立30周年を迎えて—大衆文化研究を起爆剤に—」NCHIBUNKEN NEWSLETTER No.95 二〇一七年五月

「インタビュー 日本を探索 日文研30年の歩み 上」『産経新聞』 二〇一七年五月一日

「インタビュー 日文研30年 大衆文化 世界へ発信」『京都新聞』 二〇一七年五月二四日

「インタビュー 日文研が創設三〇年迎え記念行事 日本研究の将来問う」『日本経済新聞』 二〇一七年六月一〇日

「私の住まい第二三七回 窓から見えるもの」『週刊現代』 第五九巻第二五号 二〇一七年七月

「インタビュー 連載22 将来はノーベル賞!?大学地下研究室 妖怪は私たちの願望を映す鏡です」『日刊ゲンダイ』 二〇一七年七月六日

「まえがき」『47都道府県・妖怪伝承百科』（常光徹と監修、香川雅信・飯倉義之編著）丸善出版 二〇一七年九月 i・ii頁

「序」『進化する妖怪文化研究』（小松和彦編）せりか書房 二〇一七年一〇月 五～八頁

「編集後記」『進化する妖怪文化研究』（小松和彦編）せりか書房 二〇一七年一〇月 四九二～四九九頁

「講演資料等 基調講演 妖怪の魅力はどこにあるのか？」『人間文化』vol. 27 二〇一七年一〇月

「講演資料等 パネルディスカッション 第2部「妖怪空間—でそうな場所—」『人間文化』vol. 27 二〇一七年一〇月

「インタビュー 小松教授の異界研究 シルクロードを通った鬼たち」『怪』vol.0051 二〇一七年一〇月

「インタビュー 研究は楽しい謎解き」私の妖怪研究史を語る『週刊もしもしんぶん』二〇一七年一〇月

「講演資料等『鬼』が来た道—シルクロードと日本の妖怪文化」『知恩』第八八三号 二〇一七年一二月

「インタビュー「妖怪」研究20年 進む評価 伝承DB 文化史欠落埋める」『読売新聞』（夕刊）二〇一八年一月一五日

「インタビュー 京都経済・観光特集「文化首都」として一層の情報発信を」『日本経済新聞』（夕刊）二〇一八年二月二七日

「小松教授の異界研究 蛇と結婚すると蛇になる！—異界論のための基礎知識」『怪』vol. 0052 二〇一八年三月

「対談「怪」20周年記念座談会（荒俣宏、京極夏彦、郡司聡と）」『怪』vol. 0053 二〇一八年三月

「インタビュー データベースの森 河童の姿」『京都新聞』二〇一八年三月二一日

佐野 真由子

● 著書

『国際研究集会「万国博覧会と人間の歴史」報告書』（編著）国際日本文化研究センター 二〇一七年一月 二〇三頁

● その他の執筆活動

「異文化の目で日本を見る楽しさ」『長崎県立大学佐世保校附属図書館図書館だより』No. 27 二〇一七年四月

「インタビュー 創立の物語と今 日文研の日々（下） 国際的知的交流の軸に」『朝日新聞』二〇一七年四月二三日

「共同研究会『万国博覧会と人間の歴史』から考える」（郭南燕編）『世界の日本研究 2017 国際的視野からの日本研究』二〇一七年五月

「インタビュー 文化政策としての都市計画」『Planners』八五号 二〇一七年五月

「幕末外交儀礼から考える日本研究の可能性——本当に丸い地球のために」（講演記録）『アジア日本研究ネットワーク 第三回会議報告書』3

二〇一七年六月

「文化資源学会の魅力」『文化資源学』第一五号 二〇一七年六月

「インタビュー 長崎は歴史の転回点 『既成概念』疑って」『長崎新聞』二〇一七年六月一日

「『新町の黄色い網』に遠方より思いを馳せる」『京都新聞』二〇一七年八月一日

「筒井政憲さん」『京都新聞』二〇一七年九月二二日

「出島から考える『開国』『長崎史観』推進を」(講演要旨)『長崎新聞』二〇一七年十一月二二日

「おとなの学び」『京都新聞』二〇一七年十一月二四日

「二〇二五年の万博」『京都新聞』二〇一八年二月二八日

白石 恵理

●その他の執筆活動

「日文研フォーラム・リポート」『国際日本文化研究センター(Webサイト)』二〇一八年二月

「木曜セミナー・リポート」『国際日本文化研究センター(Webサイト)』二〇一八年二月

「イブニングセミナー・リポート」『国際日本文化研究センター(Webサイト)』二〇一八年三月

瀧井 一博

●著書

『創発する日本へーポスト「失われた20年」のデッサン』(アンドルー・ゴードンと共編) 弘文堂 二〇一八年二月 四〇〇頁

●論文

「日本文明論のゆくえー様々な日本へ」『アンドルー・ゴードン、瀧井一博編『創発する日本へーポスト「失われた20年」のデッサン』弘文堂

二〇一八年二月 三五―三八二頁

●その他の執筆活動

「対談 伊藤博文はローマで何を見たか（宇野重規と）」『中央公論』第一三一巻第四号 二〇一七年四月

「書評 片山杜秀、島蘭進『近代天皇論——「神聖」か、「象徴」か』」『公明新聞』二〇一七年四月三日

「政治学の古典を読む（一九）理への献身（清沢冽）『外政家としての大久保利通』中公文庫、一九九三年」『究』第七四号 二〇一七年五月

「明治一五〇年 近代から現在を読む 憲法制定」『毎日新聞』（夕刊）二〇一七年五月一八日

「インタビュー 天皇退位特例法が成立 皇室典範に規定必要」『読売新聞』二〇一七年六月一〇日

「政治学の古典を読む（二〇）象徴天皇制の源流？（北一輝）『国体論及び純正社会主義』みずず書房、一九五九年」『究』第七七号 二〇一七年八月

「書評 家近良樹『西郷隆盛』（ミネルヴァ書房、二〇一七年）『日本経済新聞』二〇一七年九月九日

「後藤新平と伊藤博文——二つの個性のダイナミズム」『後藤新平の会 会報』第一七号 二〇一七年一月

「政治学の古典を読む（二一）権力政治家の肖像（岡義武）『山県有朋——明治日本の象徴』岩波新書、一九五八年」『究』第八〇号 二〇一七年一月

「五箇条の御誓文から明治憲法まで」『明治一五〇年 関連施策の推進に向けて——有識者からの寄稿集』二〇一七年二月

「政治学の古典を読む（二二）失われた二十年のその後（『大平総理の政策研究会報告書』自由民主党広報委員会出版局、一九八〇年）『究』第八三号 二〇一八年二月

「書評 小野寺龍太『岩瀬忠震』（ミネルヴァ書房、二〇一八年）『日本経済新聞』二〇一八年二月一七日

坪井 秀人

●論文

「大手拓次とは誰か——神話化されてきた詩人像——」『詩人大手拓次——孤独の箱のなかから——』（大手拓次生誕百〇年記念展図録）二〇一七年四月 三二—三三頁

「特集日本研究の過去・現在・未来 はじめに」『日本研究』第五五集 二〇一七年五月 九〇―一三頁
 「二十世紀日本語詩を思い出す」²³『現代詩手帖』六〇巻五月号 二〇一七年五月 一五八―一六七頁
 「二十世紀日本語詩を思い出す」²⁴『現代詩手帖』六〇巻六月号 二〇一七年六月 一八四―一九四頁
 「二十世紀日本語詩を思い出す」²⁵『現代詩手帖』六〇巻七月号 二〇一七年七月 一四八―一五八頁
 「テロルの未決算——大江健三郎「政治少年死す」ほか——」『昭和文学研究』第七五集 二〇一七年九月 一四四―一四六頁
 「旧満洲留用者の戦後」『韓国日本学会叢書』二〇一八年二月 一四五―一七〇頁

●その他の執筆活動

「痘痕」(小森陽一・飯田祐子・五味潤典嗣・佐藤泉・佐藤裕子・野網摩利子編)『漱石辞典』翰林書房 二〇一七年五月 三八五―三八六頁
 「園遊会」(小森陽一・飯田祐子・五味潤典嗣・佐藤泉・佐藤裕子・野網摩利子編)『漱石辞典』翰林書房 二〇一七年五月 九八―九八頁
 「欧化主義」(小森陽一・飯田祐子・五味潤典嗣・佐藤泉・佐藤裕子・野網摩利子編)『漱石辞典』翰林書房 二〇一七年五月 九八―一〇〇頁

パトリシア・フィスター

●論文

“Visual Culture in Japan’s Imperial Buddhist Convents: The Making of Devotional Objects as Expressions of Faith and Practice,” *Zen and Material Culture*, Oxford Press, June 2017, pp. 164-196 (査読付あり)

“Commemorating Life and Death: The Memorial Culture Surrounding the Rinzai Zen Nun Mugai Nyodai,” *Women, Rites, and Objects in Pre-modern Japan*, Brill, March 2018, pp. 269-303 (査読付あり)

●その他の執筆活動

「日文研30周年記念に思う」*NICHIBUNKEN NEWSLETTER* No. 95 二〇一七年五月

ジョン・ブリーン

● 著書

A Social History of the Ise Shrines: Divine Capital (co-authored with Mark Teeuwen), Bloomsbury, April 2017, 302 pages.

「解説 飛鳥井雅道と明治大帝」飛鳥井雅道編『明治大帝』文藝春秋 二〇一七年二月 三三〇～三四八頁

● 論文

“Amaterasu's progress: the Ise shrines and the public sphere of postwar Japan,” Hugh Cortazzi ed., *Carmen Blacker: scholar of Japanese religion, myth and folklore: writings and reflections*, Renaissance Books, 2017, pp. 396-412

● その他の執筆活動

(編集) *Japan Review*, No.31, November 2017

古川 綾子

● その他の執筆活動

「上方落語の舞台 十選」(連載二回)『日本経済新聞』(全国版) 二〇一七年四月三日～四月四日

「現代のことば」(連載二回)『京都新聞』(夕刊) 二〇一七年四月五日～六月五日

「京唄子さんを悼む」『共同通信』(一五紙掲載) 二〇一七年四月一五日

「悼む・京唄子さん」『毎日新聞』 二〇一七年五月二四日

「インタビュー 講談浪曲の今・新趣向古典芸を究めてこそ」『朝日新聞』 二〇一七年九月七日

細川 周平

● その他の執筆活動

「沖繩的音楽文化」(中国語、周耘翻訳)『黄鐘 武漢音乐学院学报 Journal of Wuhan Conservatory of Music』 二〇一七年九月

「書評 斎藤嘉臣『ジャズ・アンバサダーズ―「アメリカ」の音楽外交史』」講談社選書メチエ』『ポピュラー音楽研究』二〇一七年十二月
「お達者で」『わたしの「もったいない語」辞典』二〇一八年一月

「Francesco Cafiso + Mauro Schiavone duo concert (二〇一七年十二月九日 ナリッジ・シアター)」「Jazz Tokyo」二〇一八年一月

「舞踏子守唄」『室伏鴻集成』二〇一八年一月

「室伏鴻の突っ立つ行間」『室伏鴻集成』二〇一八年一月

「みわぞうと冬のソングブック〜みわぞうブレヒトを歌う」(二〇一八年一月一二日 中目黒 Cafe & Live spot FJs)「Jazz Tokyo」二〇一八年二月

前川 志織

● 著書

『教科書制作プロジェクト報告書 国際シンポジウム「海外が求める日本大衆文化研究のための教科書とはなにか」』(国際日本文化研究センタープロジェクト推進室として共編) 国際日本文化研究センタープロジェクト推進室 二〇一八年三月 七五頁

『なぜ国際日本研究なのか』(松田利彦・磯前順一・榎本渉・前川志織・吉江弘和共編) 晃洋書房 二〇一八年三月 一五一頁

● 論文

「チョコレートの喩えとしての「少女」：1930年代における雑誌『少女の友』森永チョコレート広告をてがかりに」『デザイン理論』No.70
二〇一七年七月 四九〜六二頁

松田 利彦

● 著書

『なぜ国際日本研究なのか』(松田利彦・磯前順一・榎本渉・前川志織・吉江弘和共編) 晃洋書房 二〇一八年三月 一五一頁
● 論文

「なぜ国際日本研究なのか」松田利彦・磯前順一・榎本渉・前川志織・吉江弘和共編『なぜ国際日本研究なのか』晃洋書房 二〇一八年三月

一七頁

●その他の執筆活動

「書評 加藤圭木『植民地期朝鮮の地方変容―日本の大陸進出と威鏡北海道』(吉川弘文館、二〇一七年)」「日本史研究」第六六四号 二〇一七年
一二月

「東アジア日本研究者協議会のこと」『青丘文庫月報』第二九〇号 二〇一八年二月

安井 眞奈美

●著書

『グリーフケアを身近に―大切な人を失った哀しみを抱いて』(編集) 勉誠出版 二〇一八年二月 一九六頁

●論文

「近代性―産科医・助産師の活躍する『医療マンガ』」山田奨治編『マンガ・アニメで論文・レポートを書く…「好き」を学問にする方法』ミネ
ルヴァ書房 二〇一七年四月 一〇九―一二五頁

“Depictions and Modelings of the Body Seen in Japanese Folk Religion: Connections to Yokai Images,” *Advances in Anthropology, Special Issue on Folk Life and Folk Culture 2017 July, July 2017*, pp. 79-93 (査読付き)

「妖怪を創ろう! 海外・ハンガリー編」小松和彦編『進化する妖怪文化研究』せりか書房 二〇一七年一〇月 三五七―三六九頁

「妊娠、出産における死―グリーフケアの物語と実践にむけて (임신・출산 시의 죽음―그리프 케어의 이야기와 실천을 향해서)」崔嘉珍 (翻
訳)『日本文化の現場と現在 (일문문화의 현장과 현재)』二〇一八年二月 一七―三三頁

●その他の執筆活動

「奈良県」『47都道府県・妖怪伝承百科』(小松和彦・常光徹監修、香川雅信・飯倉義之編著) 丸善出版 二〇一七年九月

「インタビュー 民俗学的視点とグリーフケアを考える」『読売新聞』(夕刊) 二〇一七年九月二七日

- 「フィールドワークがもたらす出会い」 *NICHIBUNKEN NEWSLETTER* No. 96 二〇一七年一二月
- 「インタビュー 探索！データベースの森 日文研30年 妖怪「うぐめ」」『京都新聞』二〇一七年一二月二〇日
- 「妖怪に性別はあるのか」『怪』vol. 0051 二〇一八年三月

山田 奨治

● 著書

『マンガ・アニメで論文・レポートを書く…「好き」を学問にする方法』（編集）ミネルヴァ書房 二〇一七年四月 二六八頁

● 論文

「序章 マンガ・アニメで研究すること」山田奨治編『マンガ・アニメで論文・レポートを書く…「好き」を学問にする方法』ミネルヴァ書房 二〇一七年四月 一〜一〇頁

“Who Moved My Masterpiece? Digital Reproduction, Replacement, and the Vanishing Cultural Heritage of Kyoto,” *International Journal of Cultural Properties* vol. 24, October 2017, pp. 295-320

「米国と企業の利益」対「利用者の要望」…1990年代から日本の著作権法はどのように変化したか」アンドルー・ゴードン、瀧井一博編『創発する日本ヘーポスト「失われた20年」のデッサン』弘文堂 二〇一八年二月 二九三〜三〇九頁

「フィクションが伝える弓道の魅力をめぐって」『武道学研究』第五〇巻第三号 二〇一八年三月 二〇一〜二〇四頁

● その他の執筆活動

「インタビュー 「共謀罪」でコミケどうなる 二次創作萎縮の恐れ」『東京新聞』二〇一七年五月一二日

「インタビュー 著作権70年延長再考を」『京都新聞』二〇一七年九月二二日

「社会に開かれた大学博物館とは 京都精華大学と京都国際マンガミュージアム」『AD STUDIES』二〇一八年三月

吉江 弘和

● 著書

『なぜ国際日本研究なのか』（松田利彦・磯前順一・榎本渉・前川志織・吉江弘和共編）晃洋書房 二〇一八年三月 一五一頁

マルクス・リュッターマン

● 著書

（共編）*Japonica Humboldtiana*, Michael Kinski, Klaus Kracht eds., Harrassowitz Verlag, February 2018, 220 pages.

● その他の執筆活動

「年月を表象する意図および元号の意味をめぐって」『日文研』六〇号 二〇一八年三月

劉 建輝

● 著書

『異邦から／へのまなざし 見られる日本・見る日本』（白幡洋三郎と共編著）思文閣出版 二〇一七年五月 二五五頁

『日中戦争』とは何だったのか 複眼的視点』（黄自進・戸部良一と共編著）ミネルヴァ書房 二〇一七年九月 三八八頁

『大連とどこどころ 画像でたどる帝国のフロンティア』（秦源治・仲万美子と共著）晃洋書房 二〇一八年三月 二六二頁

● その他の執筆活動

「インタビュー 従軍画家の絵はがき分析」『読売新聞』二〇一七年九月一日

「インタビュー 「外国人の見た富士山」探検！データベースの森」『京都新聞』二〇一七年九月二〇日

日文研 六十一号

二〇一八（平成三〇）年一〇月三一日発行

編集 倉本一宏、呉座勇一

発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国際日本文化研究センター

住所 〒610-1192 京都市西京区御陵大枝山町三丁目二番地

電話 (〇七五) 三三五―二二二二

ファックス (〇七五) 三三五―二〇九一

ホームページ <http://www.nichibun.ac.jp>

印刷 中西印刷株式会社